ドラゴンクエストＶ～友と絆と男と女(外伝)

あちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンクエストＶ～友と絆と男と女（外伝）

【Ｎコード】
Ｎ０５１０Ｘ

【作者名】
あちゃ

【あらすじ】
ドラゴンクエストＶ～友と絆と男と女の外伝です。
本編で描写されなかった部分です。

男の幸せ？（前書き）

ドラゴンクエストＶ～友と絆と男と女の結婚イベント、リュカＳＩＤＥです。
この時リュカは、こんな事を考えてました。

男の幸せ？

＜サラボナ＞

俺はビアンカと共にサラボナへ帰り着いた。
本来ならばリング入手を手伝ってくれたビアンカを、山奥の村へ送り届けるのが筋ではあるのだが…
別れたくない俺はビアンカの手を握り、ルドマンさんの元へ赴こうとしている。
花婿候補が別の女と手を取り返ってきたらどう思うかな？
怒るかな？
娘はやれん！とか言うかな？
そうなったら盾だけ貰ってビアンカと帰ろ！

＜サラボナ－ルドマン邸＞

「あ～…遅くなりました～、水のリングです」
「おぉ！リュカ！待っていたよ。どれ、水のリングも預かろうか」
俺は左手で左腰にある袋からリングをぎこちなく取り出す。
その間、ビアンカの手を握ったまま。
だが、このおっさんはリングしか見てない。
おい！！見てみろ！ラブラブだろ！気にしろよ！
「あ、あの…リュカ！…そちらの…方は…」
ルドマンさんは気付かなかったが、フローラが気付いてくれた。
「あぁ、彼女は僕の「私はビアンカ！リュカとはただの幼馴染みよ！」
慌てて手を振り解き、力強く幼馴染みを主張する…
「じゃ、じゃぁ、私はこの辺で帰るわね！」

ビアンカは帰ろうと、踵を返すが…
「ちょっと待ちなさいよ！」
扉から、ものっそいケバい格好の女性が入ってきた。
俺は格好はともかく、そのでかい胸に視線が行く。
フレアさん以上だ！
「リュカ…って言ったけ？あんた凄いわね！本当にリングを２つ手に入れるなんて」
俺の視線に気付いた女性が、偉そうな態度で語りかける。
「はぁ～、どうも…あの…どちら様？」
「姉のデボラ姉さんです」
姉ぇぇぇ！？
これ絶対、血繋がってないだろ！
「そう言う事！だから、私と結婚しても盾は手に入るわ。そうよね、パパ」
あ゛！？どういうこと？
「あ、あぁ…まあ…そうだが…急に何を言「つまり、私と結婚しなさいって事！」
わぉ！俺モテモテ！
「いきなり何だ！リュカがお前と結婚する訳ないだろ！」
いやいや！そのオッパイは魅力ですよ！
「分かってないわねパパ。リュカは天空の盾を手に入れたいのよ。だったら、私の様な絶世の美女を選ぶでしょ！」
すげー自信だな、オイ！
だいたい、俺はビアンカが好きなんだ！
セフレにならしてやるけど…
「あの…ちょっ「今回の試練は私の婚約者を決める試練です！」
フローラに発言を阻まれました。
俺、挨拶以外碌に言葉を発してないんですけど…
「それが？」
「それに参加したリュカは私と結婚するつもりなんです！」

違う！騙されて参加したんだ！盾くれるって言うから…
「見なさい、リュカの連れている女を！」
ビアンカが？
「フローラ。貴女は可愛いわ。お淑やかだし清楚で可憐よ。でも、リュカの好みはスタイルの良い美女よ！」
イヤイヤ！スタイルだけで選びませんよ！
「僕の話を聞「そう言う訳よリュカ！私と結婚するのなら、そんな田舎娘とは金輪際逢わないでもらうわよ！」
また、阻まれた！
「田舎娘って私の事！？」
「他にいないでしょ。さっさと帰りなさいよ！何時までも彼女面して居座らないで頂戴！」
「そうです！貴女がいなければ話がややこしくならなかったのに」
「な！？話をややこしくしたのは貴女のお姉さんでしょ！私は帰るつもりだったの！」
ビアンカが怒った！早く収拾を付けないと！
「ちょ、みんな僕の話し「静まらんか！」
思いの外でかい声ですね、ルドマンさん。
「みんなの気持ちはよく分かった！だが、リュカは一人しかいない。だからここは、リュカに決めてもらおうじゃないか」
やっと俺に発言の機会が巡ってきた。
「あの、僕は「つまり今夜一晩ゆっくり考えて、明日の朝に結論を出してもらう。リュカは宿屋に泊まりなさい。部屋を用意しておこう。ビアンカさんは我が家のゲストハウスに泊まるといい。遠慮はいらんよ」
阻まれた！
更に一晩待てってさ！
俺もう決めてるんだけどぉ！
どうして俺の話を聞かないの！？

＜サラボナ＞

食事を済ませ一息入れたところで、デボラに会いに行く。
もしかしたら、かなりの女で心移りするかもしれないから…ではなく、真意を聞き出したい。
だってあり得ないもの！
いきなり現れて『私と結婚しろ！』って！
相当な馬鹿じゃ無ければ裏があるね！
もし、本当に俺に惚れているのなら、一晩お試ししちゃってもいいしね！

＜サラボナ－ルドマン邸＞

広大なルドマン邸の三階部分の６割を占有しているデボラの私室。
どうやら我が儘いっぱいに育ったらしく、結婚したら手を焼きそうだ…
デボラは胸を強調させた色っぽいナイトドレスに身を包み、俺の来訪を歓迎してくれた。
これは罠なのかな？手ぇ出したらアウト？
我慢しないと不味いよね！？
「見た目良い女だなぁ…（ぼそ）」
「あ゛！？今、何つった！コラ！！」
ヤバい！口に出してた！
「見た目だけじゃ無いわよ！アンタ私の事を何も知らないでしょう！勝手な事を言うんじゃないわよ！！」
凄い勢いで怒鳴りまくるデボラ…
口を挟む事が出来ない…
・

・
・
「……ともかく！アンタはフローラの事を愛してないでしょ。そんな男と結婚したら私の可愛い妹が不幸になるのよ！だからアンタは私と結婚しなさい！命令よ！」
「あはははは…勝手だなぁ～…」
「な、何よ！」
「僕には僕の人生がある。だから僕は自分の意志で物事を決めるよ。命令は受けない」
「じゃぁ…一晩、じっくりと考える事ね！どの女を選ぶか…」
我が儘に育ったけど、馬鹿女では無い様だ。

俺はデボラの部屋を後にして、フローラへ会いに行く。
（コンコン）
2階の一角にあるフローラの部屋のドアをノックする。
「フローラ？入るよ？」
返事は無かったが鍵が開いていた為、ノックの勢いでドアが開いてしまった。
室内に入ると薄明かりの中ベットに横たわる人影が一つ…
近付き話しかける。
「あれぇ？寝てるのぉぉぉぉぉ！すげー格好だな！オッパイ丸見えじゃん！」
何この姉妹！
やり口があざといよ！！
頑張れ俺！負けるな俺！！
「話をしようと思ったけど…」
バレバレの狸寝入りですね。（クス）
（スッ）
俺はフローラに布団をかけ、下半身の暴れん坊将軍を理性で押さえ付け、寝た芝居をするフローラに対し、紳士的な芝居で対抗する。

「風邪引くよ…」
そして後ろ髪が引かれまくる中、フローラの部屋を後にする。
（バタン）

＜サラボナ－ルドマン邸－ゲストハウス前＞

もう、俺の頭にはビアンカの裸しか無い！
どうせ明日告るんだから、今すぐ告って前祝いしてもいいよね！
「リュカ！こんな遅くにどうしたの！？」
不意に上から声をかけられた。
見上げるとビアンカがテラスから身を乗り出し話しかけてくる。
「ビアン「何かごめんね！私がもっと早く帰っていればよかったのに。」
俺の言葉を遮るビアンカ…口説かせない気か！？
「ま、デボラさんも混乱の一翼ね！」
「あ、あぁ…」
「リュカはフローラさんと結婚して幸せになるべきよ。」
「幸せ…に…」
俺の幸せはビアンカと共にある！
「天空の盾を手に入れて、パパスおじさまの遺志を継がないと…」
父さんもきっと、俺の幸せを優先してくれる…はず…
「父さんの…気持ち…」
「いい！もうリュカは不幸を背負い込む必要無いんだから…幸せに…ならなきゃ…」
まいったな…また、ビアンカを泣かせてしまった…
「幸せ…か…」
「そうよ！貴方のお姉さんとして…貴方が心配よ…」
……お姉さん！？ふざけやがって…そんな軽い気持ちじゃ無い事を明日分からせてやる！

「ビアンカは何時もお姉さんぶるね。」
俺は萎えてしまった暴れん坊将軍と共に、ビアンカの前から立ち去る事に決めた。
沸々とルドマンへの怒りが湧いてくる。
ビアンカを泣かせる原因を作り出した、あのおっさんへの怒りが…

＜サラボナ－ルドマン邸＞

あ～あ…結局昨晩は一発も出来なかったな…
今もメイドさんをナンパしたら怒られたし…
あ ～！ルドマン、ムカつく！

（コンコン）
俺の事を叱ったメイドさんに案内され、みんなの居る応接室へ入室した。
「リュカ…良く眠れなかったかな？」
「え？バッチリ爆睡です！どうしました？」
「いや…表情が暗かったのでな…」
お前のせいだ！
「あぁ！いや…そこでメイドさんをナンパしたら怒られまして…『婚約者がいるのにふしだらです。』って…結婚したらナンパしちゃダメ？」
別にまだ独身なんだからいいじゃん！
「で！三人の内誰と結婚するか決めたのかね！？」
何か口調がきつい…
「あれ？イラついてる！？（クス）…冗談ですよ…」
何でお前がイラついてんの？
頭にきてんのは俺だよ！
「いい加減にしたまえ！昨晩の大騒ぎは君も知っているだろう！真

面目にやりたまえ！」
お前が言うな！
「大騒ぎの原因を作ったのは貴方でしょう…僕にイラつかれても困ります。」
もう今日は言いたい事を言わせてもらうかんね！！
「で、では、誰とけっこ「その前に！」
その前に言わせろ！
「その前に、僕はルドマンさん！貴方に言いたい事が…文句があります。それを言い終わらない内は、事態を進めるつもりはありません！」
「何かね」
「まず最初に、この事態の原因になったフローラの結婚相手を決める試練の事です。」
何で俺が巻き込まれなければならないんだ！
「貴方が築き上げた財産や資産を譲渡するのは貴方の自由だ。だが、フローラの人生を自由にしていい訳無いでしょう！」
金持ってるからって何でも自由になると思うのは間違いだ。
「今回…結果的に大事には至らなかったが、もし財産目当ての腕っ節馬鹿が合格していたらどうするつもりでした！？」
「だが…この物騒なご時世、フローラを守るには力がいる！だから
「馬鹿ですか！あんたは！」
それじゃぁ婿捜しじゃなく、ボディガード探しじゃん！
「物騒な世の中からフローラを守るのなら、金を使って武装すればいいだろ！一人の物理的な力なんてたかが知れてる。盗賊が１０００人で攻めてきたら何も出来やしない。」
一人に期待しすぎなんだよ、馬鹿！
「むしろ、そんな腕っ節馬鹿はフローラを不幸にする！」
ルドマンさんの表情が驚きへと変化した。
コイツ結婚後の事を何も考えてねぇーな！
「多額の泡銭が入り、あっちこっちで金を散撒き女をつくる！フロ

ーラの事を顧みてない男は、その事を指摘されると腕っ節に物を言わせるでしょう！」
俺を含め、男なんて勝手な生き物なんだ！
自分を見ればよく分かるだろうが！
「もう一件、言いたい事が…これは、この場にいるみんなに言いたい！」
みんな自分の事ばっか…
「昨日、僕の話を誰も聞こうとはしなかった！何度自分の気持ちを言おうとして遮られた事か！挙げ句、一晩悩んで持ち越せって…」
言い終え我慢出来なくなり、俺はビアンカへキスをする！
俺の暴れん坊将軍は押し倒せと命令するが、さすがにそれは我慢した。
「ちょ、リュカ！何！？」
驚くビアンカ…
もう反論は許さない！
「ビアンカ！好きだ！愛してる！」
「何言ってるの！私なんかを選んだら天空の盾が「あんな物いらない！ビアンカがいい！」
「あんな物って…パパスおじさまの遺志は！」
「父さんを侮辱するのはやめてくれ！」
「ぶ、侮辱って…」
「父さんは偉大で優しい人だ！僕の幸せを思ってくれる人だ！」
父さんなら俺の幸せを一番に考えてくれる人だ…多分…きっと…
「それに天空の剣があれば、勇者を捜せる。勇者を見つけてから盾を貰いに来ればいいし…」
「リュカ…そんな…私…」
「後はビアンカの気持ち次第だ。もし僕の事が嫌いだったら…諦める…誰とも結婚しない…」
独身の方が気楽だよね。
「私　（ヒック）も…リュ　（ヒック）リュカの事が　（ヒック）

大好き…」
うっ！やっぱりビアンカに泣かれると戸惑うな…
「リュカじゃなきゃヤダ！私…私…」
ＯＫって事だよね！
俺は腕の中で泣きじゃくるビアンカを見つめながら思う、独身捨てるのちょっと惜しいなと…
「私を選ばないなんていい度胸ね！」
同じように泣きじゃくるフローラを抱き締め、デボラが嬉しそうに話しかける。
「（クスッ）…そうですね…妹思いの巨乳美女は捨てがたかったですね…（クスクス…）」
「フローラを馬鹿男共から守ってくれてありがと。」
見た目とは裏腹に、優しい女性だな…
「ビアンカを救ってくれたからチャラです。」
ま、デボラにとってはビアンカは偶然救われたのだろうけど…

フローラとビアンカが一通り泣き止むのを待ってから切りだした。
「では、僕らはそろそろ行きます。」
これ以上ここに居たら、何に巻き込まれるか分かったもんじゃない！
「待て！私は結婚式の準備をしてしまっているのだ！これを無駄にする事は許さん！」
知るか、そんな事！
「ふう…つくづく勝手な人ですねぇ…貴方は…」
お前が勝手に準備しただけだろが！！
「何とでも言うがいい！私はリュカ…お前が気に入った！私の好意を受け取ってもらうぞ！」
「好意の押し売りです。それは…」
う～ん…結婚式って金かかるよね…
人の財布で挙げられるのは美味しいなぁ…
腕の中のビアンカを見る…泣き腫らした顔だが美人だ…

「そんな訳で2日後には式を執り行う。」
ちょ、OKって言ってないし！
「2日！？はぇ～よ！準備は…」
「準備は殆ど出来ている！お前はほっておくと浮気をしそうだからな！サッサと結婚させておくしかないだろ！」
「そ、そんな事は…（ゴニョゴニョ）」
うっ！痛いところを…
「それとリュカにはやってもらいたい事がある。」
やば！また、面倒事か？
「何ッスか？娘さん二人の今晩のお相手？」
「コロスぞ！…そうじゃない！お前のルーラで招待客へ招待状を渡し、連れてきてほしいのだ！」
何で主役の一人がパシらなければいけないの？
「えーめんどくせー」
「コラ！リュカ！貴方にしか出来ないんでしょ！」
ビアンカに怒られました…
「…は～い…その間ビアンカは？」
「ドレス合わせの為残ってもらう」
仕方ないか…ビアンカの為に盛大な式にしたいしね！

男の幸せ？

＜ラインハット城＞

ルーラでラインハットまでやって来た。
ヘンリー驚くだろうなぁ。

先ずはデール君に報告。
「元気してた？デール君」
「はい。おかげさまで…ところで、お一人ですか？珍しいですね？」
「うん。今度、絶世の美女と結婚する事になったんだ！」
「ご結婚なさるんですか！おめでとうございます！」
「うん。２日後だけどね」
「２日！？い…いきなりで、いきなりですね…」
言いたい事は分かるが、酷い台詞だ。
「あ！待っていて下さい！今、兄さんを…ヘンリー兄王を呼んできます！」

澄ました面してヘンリーが下りてきた。
「やあ、ヘンリー。まだマリアさんは愛想を尽かしてない？」
「あのなぁ…まったく…お前こそどうなんだ？ピエール達に嫌われたん…じゃ？」
俺が一人で居るって、そんなに珍しいかな？
「おい！ピエール達はどうした！？本当に…」
「そんな訳ないだろ。他のみんなはサラボナで人質になっている」
「人質！？どういう事だ！」
「うーん…僕が逃げ出さない様に…かな？」
説明がめんどくせーからこれ読め！
「これ…読めば分かるから」

結婚式の招待状に目を通すヘンリー。
「お前、結婚すんのか！？」
・
・
・
式まで時間が無い事を伝え、参列者を募る。
「何でこんなギリギリで招待状を配ってるんだよ！」
「しょうがないじゃん！プロポーズしたのついさっきなんだから！」
「じゃぁ、それに合わせた結婚式のプランを立てろよ！」
「だって…早く結婚式を挙げないと浮気するだろ！って言われたんだもん！」
「ルドマンさんは賢いなぁ…」
納得しちゃったよ、この人！
ムカつかない！？ムカつくよね、これ！？

皆に声をかけ参列を確認するヘンリー…
ヘンリー、マリアさん、ヨシュアさん、マリソル、デルコ、この5人が参列する事に決まった。
マリソルなんかは泣きながら「私がリュカさんと結婚したかったのに…」と、可愛い事を言ってくれる。
でも、もう勘弁して欲しい…
あの騒動は二度と経験したく無い！
「リュカさん、このままサラボナへ行くのですか？」
「いえ、マリアさん。次は海辺の修道院へ行きます」
第二の人生の出発点だしね…

＜海辺の修道院＞

何か、ここに来るのも久しぶりだな。

修道長に結婚を報告する。
「まぁ、おめでとうございます。リュカもとうとうご結婚されるのですね」
「はい。つきましては、お世話になったシスター方にご参列頂こうと思いまして、お迎えに上がりました」
「シスター・アンジェラ。貴女がご出席してあげなさい」
「修道長様は？」
「私はここでリュカの為に祈りを捧げたいと思います。リュカ、シスター・アンジェラを連れて行って頂いてもよろしいですか？」
むしろ、ババアが来るより嬉しいね。
「はい」
「では支度をして参ります。少々お待ち下さい」
アンジェラさん美人だよねぇ～…
「アンジェラさーん！荷物はそんなに必要ないですから。殆どサラボナでルドマンさんが用意してくれます。着替えを1．2枚で大丈夫ですよ。何なら裸でもいいし…いや、むしろ裸の方が…」
ゲシ！
「お前は…結婚すんだろ！」
「関係ないだろ！結婚したって、嫁がいたって、女の裸は見たいだろ！」
良い子ぶってんじゃねぇーよ！
「リュカさん！私なら何時でも見ていいですよ！」
だからマリソル好き！
「マリソル…期待…しちゃうよ、僕…」
ポカ！
ポカ！
「「いたーい」」
「お前らは～…」
「ふふっ…アナタは弟妹が沢山いますね」
「まったく…手のかかる…」

＜サンタローズ＞

相変わらずでかいオッパイを揺らしながら俺の報告に驚くフレアさん。

「リュー君、結婚するの！？」

「はい。アルカパに住んでいたビアンカと…」

結婚の報告に来たのにキスされた！

ちょっと結婚の意思が揺らぐね。

「こんなに愛している私を捨てるの！？」

「捨てないよ。結婚はするけど捨てないよ」

ちょくちょく遊びに来よ！

ビアンカにばれない様にしないとね！

（ゲシ！）

ヘンリーに蹴られる！

「そんな訳いかねぇーだろ！」

「あいた！」

「ちょっと！ヘンリー様！リュー君に乱暴しないで！」

「そうよ！ヘンリー様！」

「うっ！マリソルまで…」

ヤバイじゃん！俺、モテモテじゃん！

やっぱ結婚すんの勿体ねぇーな！

「じゃぁ…それでいい！リュー君の事お祝いするね。でも、サラボナへ行ったら悔しいからビアンカちゃんをいぢめる」

「（クス）…ビアンカは強いよ。かなりの修羅場潜り抜けたから」

結構バラ色の人生だね！

＜山奥の村＞

あ～…やっべ～…緊張してきたかもしんない！
よく考えたら、ここに一番に来なきゃダメだろ！？
つーか全てにおいて順序間違ってるよね！
『娘さんを僕にください！』って言う前に結婚式の招待状を渡す…
今更断られたらどうすんの？
『お前にビアンカはやらん！』って言われたらどうしよう…
参列客を引き連れて来る所じゃないよね！？

ダンカンさんが優しそうに微笑んでいる。
「おや？リュカ…どうしたんだい？こんな大人数で…ビアンカの姿が見えないが…いったい…？」
「ビアンカはサラボナで結婚式の準備をしています。お義父さん」
「…？お義父さん？…リュカ…お前はサラボナのフローラさんと結婚する為に、危険な試練を受けたのではないのかね！？」
「何！どういう事だ！詳しく聞かせろ、リュカ！」
俺とダンカンさんの会話に割り込むヘンリー。
あ゛ー、うるっせーなコイツ！
今、それどころじゃねぇーだろ！

・
・
・

大分端折ったが、大まかには説明出来たね。
驚いてはいるが、納得はしてもらえたはず…
「…リュカよ！父親としては嬉しい限りだが…ビアンカと結婚しては、天空の盾が手に入らないのでは？」
アンタもそう言う事言うか！
「いりません！あんな物！どうせ装備出来ませんし！」
「しかし…パパスの…」
いいんだよ！あんなもん！！

「僕はこの世界の何よりもビアンカが好きなんです。ビアンカと結婚して後悔はありませんし、これからもしません」
アンタが『娘はやらん！』と言っても結婚するから！
「リュカ…お前に話しておく事があるんだ…」
何だぁ～、そんなに俺に娘をやりたくないのか！？
「もしかして、ビアンカとは血の繋がった本当の親子じゃないんですぅ～とか言う？」
「！！知っていたのか！？」
……嘘だろ！オイ！正解しちゃったよ！
言う！？今ここで、そう言う事言う！？
「え！？…えぇ…まぁ…」
何て答えればいいんだ…
「そうか…知っていたか…ビアンカは私とアマンダの「どうでもいいです！」
「おい！リュカ！どうでもいいはないだろ！」
もうムリ！これ以上難しい話はしないで！
キャパシティオーバーです！
もうどうでも良いです！
俺はただ、ビアンカとエッチしたいだけですから！
「僕とビアンカが実は血の繋がった姉弟だったら重要な事だけど、この場合はどうでもいいです」
血が繋がっていたらヤバいけどね！
「僕が愛しているビアンカという女性は、ダンカンさんとアマンダさんに育てられた素敵な女性です。そしてビアンカがダンカンさんをお父さんと呼ぶ限り、僕にとって貴方はお義父さんです。これからも娘夫婦を暖かく見守って下さい。よろしくおねがいします」
ともかく、そう言う事で納得しろ！
もうこれ以上話をめんどくさくするな！
また、あの花嫁選びを再開したくないから！

＜サラボナ－ルドマン邸＞

2日がかりで参列客を連れ帰り、ルドマンさんに報告をすると、
「リュカ、戻ってきて早々悪いのだが、もう一つ用事を頼みたい」
何だよこのおっさん！
結婚式費用を負担するからって、調子こいてんじゃねーぞ！
「何ッスか？」
「うむ、実はな…ここから北に行った所に山奥の村があってな、そこの職人に花嫁用のシルクのヴェールを注文してるのだよ。それを受け取って来てくれ。お前の花嫁の為に注文した物なんだから…」
（怒）今さっき、そこから帰って来たんだ！！
「分かりました！！行ってきますよ！！」
俺はビアンカに会いたい衝動を抑え、再び山奥の村へと飛んで行く。
「んだよ！あのハゲ！先に言えよ！二度手間じゃねぇーかよ！」

＜山奥の村＞

村に着き、件の職人を捜す。
村人に聞くと、村の入口付近の洞窟で商いをしているのが、その職人だそうです。

「あのぉ～…シルクのベールを受け取りに来たんですけどぉ～」
中にはおっさんが一人。
「おう！良く来たな。既に出来上がっているぞ！」
何か馴れ馴れしいおっさんだ。
……何処かで会った事がある様な……
「あれ？クライバーさん！？もしかしてサンタローズで薬師をしていたクライバーさんですか！？」
「何だ？俺の事を知っているのか？」

やっぱりそうだ！
「僕です！パパスの息子、リュカです！」
「なんと！？無事だったのかリュカ！良かった！本当に良かった！！」
「クライバーさんも、よくご無事で」
「うむ…ちょうどラインハットが攻め込んできた時に、サンタローズから離れておってな…俺だけが助かってしまったのだよ…」
……そうか、ご家族はもう…
「で、お前さんはどうしていたのだ、今まで？」
俺はこれまでの事をクライバーさんに告げた。
・
・
・
「そうか…パパスは死んだか…お前も苦労をしたのだな…」
「クライバーさん、大丈夫ですよ。僕は今、幸せ絶頂期ですから」
「お！？そうか、シルクのベールを必要としているという事は結婚するのか！」
「そうです。クライバーさんは覚えていますか？アルカパに住んでいたビアンカを…」
「覚えてる、可愛らしい女の子だった。あの娘の為にお前は一人で洞窟へ入って行ったけな！」
「そうです。ちなみにアルカパからこの村に移り住んでいた事はご存じですか？」
「何！？何時からだ！？」
「もう、７．８年前と聞きましたが…」
気付かなかったの？マジで！？
「３年もこの村にいて気付かなかった！この村の何処に住んでいたんだ？」
「一番奥の家にです」
「それじゃぁ、あの美人さんがビアンカちゃんか！！この村の若い

男は…イヤ、若くない男も、みんな狙っていたのだぞ！上手い事やりやがって！」
「あははは！」
俺は嬉しい再開に思わず時間を費やしてしまった。
・
・
・
「……おっと！これ以上引き留めては申し訳ないな！ほら、これがシルクのベールだ。ビアンカちゃんにお似合いだろうて」
「ありがとうございます」
俺はシルクのベールを受け取り、クライバーさんの元を後にする。

＜サラボナ－ルドマン邸＞

「ただいま！」
俺はビアンカが待機している部屋へ入る。
そこにはフローラやフレアさんがビアンカと楽しげに会話をしていた。
「おわ！ものっそいキレイじゃん、ビアンカ！」
侮ってました。
ビアンカすっげ～キレイ！
ヤバイ、ヤバイです！押し倒したいです！！
「もう結婚式なんかより初夜迎えたいんだけどベット行かない？」
「何子供の前で馬鹿言ってんだ！」
うっさいのぉ～コイツは！
「いた～い。何すんの…主役よ！？今日、僕は主役なんですよ！」
「じゃぁ、真面目にやれ。」
出来るか！
こんな美女を目の前にして！

「みんなが居たから恥ずかしくって戯けたんじゃないかぁ～」
「みんなが居なかったら押し倒しているだろうが…」
さすがヘンリー…俺の事を分かってる！
「てへ」

男の幸せ？（後書き）

次回、結婚披露宴です。
お楽しみに。

男の幸せ？

＜サラボナ－ルドマン邸－披露宴会場＞

結婚式は滞りなく終了した。
参列客の幾人かは俺がやらかす事を期待していた様だが…期待を裏切ってやった！！
ザマミロ！！
俺の目の前ではヘンリーがエラソーに結婚について語っている。
相づちを打っているが聞き流す俺！
「……って、聞いてるのか、リュカ！！」
怒るヘンリー！
「聞いてませんでした。くどくどうるさいので」
「うるさいってお前…まぁ、いい…そんな事よりも！お前にビアンカさんを幸せに出来るのか？」
よけーなお世話だ！
「うっさいなぁ～…」
「お前なぁ～重要な事だぞ！！」
「ヘンリーさん。大丈夫です！私はリュカを不幸にしてでも幸せになってみせます！」
「ははは、なら安心だ」
何で安心なんだよ！
「そうです！！私の初恋の人を奪ったのですから、死んでも幸せになってもらいます！」
ちょっと！？誰だよフローラに酒飲ませたのは！！？
「私だって初恋です！」
マリソル！？火に油を注がないでほしいのだが…
「何ですか！？私なんかリュカのおかげで価値観が変わったんですよ！」

大袈裟だよ！
「サラボナから離れる事に不安を持っていた私に、世界の素晴らしさを教えてくれたんです！」
ちょっと何言ってんのこの娘！？
「私なんか人生を救われたんです！！」
マリソルさん！？酔っ払いを刺激しないで！！
「リュカさんが居なかったら私も弟も餓死してました！リュカさんは私達の救世主です！」
話がでかくなってきた……
「さっすがリュー君！色んな人を救ってるのね！」
今の俺を救う人は居ないのですか？
「私も…レヌール城で救われたわ…」
「（クス）また懐かしい事を…」
「あの日、私の心は決まったの！リュカ以外の男性は好きにならないって！」
俺にとってレヌール城で一番記憶に残っている事と言えば、ソースまみれになった事だ！
「ソースまみれになった甲斐があったかな？」
「うん！バッチリよ！」
ヤバイ！ヤバイヤバイヤバイ！！！
可愛い！可愛い可愛い可愛い！！！
今すぐベットインしたいですぅ！！
「だからあげたのよ！」
え！？何を？処女の事？
「ちょっとリュカ！？憶えて無いの？アルカパで別れの間際にあげたじゃない！」
「え？何の事？アルカパで処女貰ったけ？」
「ち、違うわよ！！何でそう言う思考回路なの！！」
「じゃ何！？」
「パ、パンツ…よ…」

「パンツ？」
何？
「本当に憶えてないの！？リュカが欲しいって言ったのよ！」
「お前…そんな事言ったの？」
……！！
「あぁ！！言った！言った言った！確かに言った！」
「馬鹿なの？お前…」
呆れるヘンリー。
「いや…だって…本当にくれるとは思わなかったんだ」
もう亡くしちゃったから忘れてたよ。
すると突然、ワインボトルを片手にフローラが立ち上がり叫ぶ！
「私もパンツあげたんです！」
うん。皆さん唖然です。
「リュー君の初めての相手は私よ！」
人の悪い笑みを浮かべたフレアさんが、やはり立ち上がり叫ぶ！
この人、素面だよね！何でこんな事叫べるの！？
「うるさい！私だってリュカの事が好きなんだ！！」
まさかのピエールがふらつきながら叫ぶ！
知ってたけど、今叫ぶ！？
ピエールのテーブルの上には、空になった酒のボトルが俺の歳の数以上転がっている。
どんだけ飲んだんだ！？
酒落にならない空気になってきた…
ヘンリーに助けを求めようと視線を向ける。
手を左右に振り、『ムリ！』とジェスチャーで答える。
頼りになる親友だ！！（怒）
「でも結婚したのは私よ！」
ビアンカが手にしていたワインを一気に飲み干し高らかと叫ぶ！
ビアンカ姉さん！アナタまでそう言う事言っちゃうの？
俺も弾けちゃうよ！

「愛人募集中です」
ドサマギです。
もう、そう言う場にしましょう。
言いたい事を言いましょう。
「「「お前は……」」」
ヘンリー、ヨシュアさん、ルドマンさんが声を揃えて怒ろうとするが…
「はーい！私、リュカさんの愛人になりまーす！」
マリソルの元気の良い発言に、言葉を失う。
もう、この後は大騒ぎです。
飲んで、歌って、叫んで、泣いて…
・
・
・
結婚して良かったと思います。

＜サラボナ　ルドマン邸＞

俺の目の前で、ビアンカが俺の手から何かを取ろうと藻掻いている。
「おはよう、ビアンカ…何してんの？」
「何って…パンツ返して」
どうやら俺が握り締めていたパンツが目当ての様だ。
「何で？」
「あのねぇ～もう日が高い位置にあるのよ！リュカはみんなを送り届けないといけないでしょ！」
気にする事ないのに…
「いいよ、待たせておけば…それよりパンツ穿く前に！」
そう言ってベットに押し倒す…第2ラウンド開始だ！
・

・
・
服を着たままも燃えるな！

＜サラボナ＞

一通り満足し（ビアンカはお疲れです）、町のカフェテラスへ赴くと参列客プラス旅の仲間達が、雁首揃えて昼食中だ。
「やぁ、みんな！おはよう」
俺はヘンリーの隣へ座り、来たばかりのパスタを勝手に食べる。
多分ヘンリーのだろう。空腹は最高の調味料だ。
「おはようじゃねぇー！何時だと思ってんだ！もう昼過ぎてんだぞ！」
相変わらずうるさいのはヘンリーだ！
「まーまー、アナタ落ち着いて下さい」
さすがマリアさんは優しいなぁ。ヘンリーには勿体ないなぁ。
「リュー君。ビアンカちゃんは？」
「ビアンカならまだ寝てるよ」
パスタを食べながら答える。
ところでこれ、うめぇーな！
「お前昨晩ガンバりすぎなんだよ！」
新婚だぞ！頑張っちゃうに決まってんだろ！！
「いやいや…朝は起きてたんだ。でもさっき第2ラウンドになっちゃって…」
「お前…俺達待たせて、何やってんだよ！」
「うん。ナニやってた」
聞く方が間違ってると思いませんか？
公明正大にエッチ出来る仲ですよ！
足腰立たなくなるまで頑張るに決まってるじゃないですか！

「さて！じゃぁ行きますか！」
ヘンリーのメシも食い終わったし、これ以上待たせたらヘンリー以外の人に悪いし、出発するとしましょう。

＜山奥の村＞

最初はダンカンさんを村まで送る。
村の入口で「私はここで良いから…他の皆さんを送ってあげなさい。」って…
さすがはお義父さん。いい人だ。

＜ラインハット＞

次はゴチャゴチャとうるさい男を送ってやる。
これでも一応王族だしね。
「俺達もここで良いよ」
城の入り口で軽く別れを切り出すヘンリー。
「お前の旅も大変なのは分かるが、ビアンカさんを大事にしろよ！」
「僕が女の子を大切にしなかった事があるか！？」
「そう言う意味じゃ…まぁ、いい！じゃぁ、気を付けて…」
珍しく歯切れが悪い？何だろう？お腹空いてるのかな？

＜海辺の修道院＞

シスター・アンジェラを修道院に送り届ける。
修道長と2．3話をし、別れを告げると寂しそうなシスター・アンジェラの顔が伺える…

「アンジェラさん。僕の愛人になりたくなったら何時でも言って下さい！随時募集中ですから（笑）」
苦笑いではあったが、笑顔で別れる事が出来た。
今生の別れでは無いのだから、涙や寂しさは不要だ。

＜サンタローズ＞

元実家裏の父の墓標。
遺体も遺品も無い石を組み合わせただけの墓。
もし父さんが生きていて、ビアンカと結婚すると告げたら、どんな顔したのかな？
ビックリするかな？納得するかな？…反対はしないだろうな！
……両親が居ないって、こんなにも寂しい事なんだ…
イカン…悲しくなってきた…
ビアンカの元に帰って、心と暴れん坊将軍を慰めてもらお…

俺は丘の上の教会へ向かいフレアさんに挨拶を告げる。
「じゃ、新妻を待たせると怖いので帰ります。」
すると、潤んだ瞳のフレアさんが抱き付きキスをしてきた。
い、今はマズイですから…
俺の暴れ坊将軍が命令を下す！
ゴー・アタック！
ゴー・アタック！
ゴー・アタック！
将軍閣下には逆らえませんでした。

男の幸せ？（後書き）

この時リュリュが装填されました。

哀れな男、心の闇、悲しい結末（前書き）

とても気分の滅入る話です。
先に謝っておきます。
ごめんなさい。

哀れな男、心の闇、悲しい結末

＜ポートセルミ－酒場＞

俺の名はジャイー。
故郷のアルカパから出て2年。
今は、このポートセルミの酒場で黒服として働いている。
黒服とは…要は踊り子達のボディーガードだ！
酔っ払ったバカが踊り子にちょっかいを出したら、この鍛え上げられた肉体で駆逐する！
まぁ…後は雑用を少々…
俺の場合雑用が多い。
俺に刃向かうバカは居ない！

そんな俺の目下のお気に入りは、踊り子の『クラリス』だ！
整った容姿に、大きな胸、そして細いウエストは堪らない！
そのクラリスの出番も全て終わり店を出て行こうとしている。
俺はクラリスに近付き話し掛け口説く。毎日の日課の様なものだ。
こう言った日々の積み重ねで女は心を許すんだ！
「よう、クラリス！今日も色っぽくって良かったぜ！…なぁ、そろそろ俺と付き合えよ！お前も俺に惚れてんだろ！」
「ちょっと！冗談止めてよね！！何で私がアンタなんかと付き合わなきゃいけないの！？」
これがウワサのツンデレか？困ったもんだな…女って生き物は。
この後も口説き続けたが、
「いい加減にして馬鹿！！」
と、顔を赤くしてクラリスは逃げてしまった。
よほど恥ずかしかったんだろう…
顔…真っ赤だったぜ！素直になればいいのに…

少しばかりクラリスとおしゃべりがすぎた様で、仕事が溜まってしまった。
店長にどやされ、もう上がる時間にも拘わらず俺はステージにモップをかけている。
すると酒場の奥で一人の田舎者を三人のならず者が囲みカツアゲをしている。
俺は今、時間外だ！面倒事に首を突っ込んでられない！
よく見るとならず者共は、最近ラインハットから流れてきた兵士をクビになった連中だ。
他のみんなも遠巻きに眺めている。
しかし、一人の旅人風の男が近付き不思議そうに眺めている。
ならず者のリーダー格が、男の視線に気が付き不機嫌な態度で男に詰め寄る。
「何見てんだ！？にいちゃん！！」
ならず者が恫喝をするが、男は怯えた様子もなく答えた。
「いえ…変わったナンパだな～と思いまして。あ！どーぞ―…気にせず続けて下さい。邪魔しちゃ悪いから。」
「ぷーっ！！」
ツレの女が思わず吹き出したのを合図に、ならず者は怒りのまま剣を抜き放ち、男へ斬りかかる。
勝負は一瞬で着いた。
近距離から斬りかかったにも拘わらず、男は軽く去なし、ならず者リーダーを遠く離れた壁まで投げ放つ！
頭から壁に激突したリーダーを、手下二人が抱え逃げて行く…
フン！俺だってあのくらい出来るさ！
俺はああ言うスカしたヤツが嫌いだ！
初恋のビアンカと仲良くしていたのも、あんな紫のターバンを巻いたスカしたヤツだった！
同一人物か！？

イヤ、そんなはずない！
ヤツの故郷のサンタローズは滅ぼされたんだ…
一緒に嬲り殺されたに違いない！いい気味だ！
・
・
・
俺はさっさとモップがけを終わらせ、自室へと帰る。
自室と言っても、店が提供するボロアパートだ。家賃は給料からの天引。
店長のアホにゴチャゴチャ言われなければ、もっと早く帰れたのに…
あのアホ、いつかぶっ飛ばしてやる！

今日も夕方になり、俺は酒場へ仕事に出かける。
店長のアホが、遅刻だ何だと喚いている。
朝、時間以上働いてたんだから、遅れて来ても構わねぇーだろーが！！

相変わらずムカつくヤローだ！
取り敢えず詫びの言葉を吐いて仕事に取り掛かる。
ステージでは既にクラリスが踊っている。
本当に良い女だ！
絶対俺の物にしてやる…こんだけ毎日口説いてんだ。もう少しで落ちるはず！
そうしたら毎日犯してやる！
ステージで腰を振るか、俺の上で腰を振るかの毎日にしてやるぜ！
そんな事を考えていたら、先輩黒服の『ゴドラド』が俺の頭を小突いてきた。
「テメェー、何サボってんだ！今日、遅刻してんだからその分多目に働けボケェ～！」
本当、この店はムカつくヤツらばかりだ！
いつかぶっ殺してやる！

その日俺は裏方の仕事を押し付けられた。
皿を洗ったり、倉庫から酒を運んだり…
そろそろクラリスが上がる時間だ！
俺は仕事を放り出し、クラリスを迎えに行く。
店内に入ると、クラリスはステージ衣装のまま、客とテーブル席で会話をしている…朝のスカした男だ！
顔を近づけ楽しそうに会話をしていたが、立ち上がり二人して宿屋へ向かって行った！
ふざけやがってあのヤロー！！
その女は俺の物だ！手ぇ出してんじゃねぇー！！
俺は男をぶっ飛ばしてやろうと思い、ヤツの元へ近付く……前に、突然店長が現れて俺に怒鳴りだした。
「テメー今日は裏方だろが！何で店内でサボってんだ！ちょっと来い！」
俺は後ろに控えていたゴドラドに胸ぐらを捕まれて店長室まで連れて来られた！
クソ！今それどころじゃねぇーんだよ！
俺の女が食われちまうだろが！！
・
・
・
もう1時間近く説教をされている！
ゴドラドは店内に戻ったが、店長の小言は尽きる事が無い！
俺の我慢も限度を超えた！
「うっせーんだよ！クソオヤジ！！」
俺の拳が店長の左頬にめり込む。
血を吐いて倒れた店長に、2度3度と蹴りを入れ俺様の怒りを思い知らせる！
本当はまだやり足りないが、それどころではないので、この辺で勘

弁しておいてやった。
慌てて宿屋に向かい、受付のオッサンにヤツの部屋を訪ねたが『そう言った事を教える事は出来ない！』と、ナメた事抜かしやがった。
2．3発ぶん殴ってやったら、泣きながら喋ってきた。
最初から素直に喋っていれば痛い目をみないで済んだものを……
俺はヤツの部屋の前まで行くと、ドアに耳を当て中の様子を伺う。
ベットの軋む音と共にクラリスの喘ぎ声が聞こえてくる。
ぶっ殺してやるあのヤロー！！！
ドアを蹴破ろうとした瞬間、俺の脇腹に衝撃が走った！
周りを見るとボロボロの店長とゴドラド達数人の黒服に囲まれていた！

気が付いた時は既に翌日の夕方だった。
俺は酒場横のゴミため場に捨てられていた。
ヤツら数人がかりで俺をボコボコにして、ゴミと一緒に捨てやがった！
見渡すとゴミと一緒に自室にあった俺の荷物も捨てられている。
どうやら追い出された様だ…
フン！こんな店こっちから出てってやるよ！！
だが俺を裏切ったクラリスを許す訳にはいかない！
俺は痛む身体で酒場のステージ奥にある楽屋へ赴きクラリスに詰め寄った。
「おい、クラリス！昨日、あのターバンの男と何やってた！」
「何って…アンタには関係ないでしょ！」
「ふざけんな！お前は俺の女だ！他の男と寝るなんて許さねぇ！」
「何で私がアンタなんかの女にならなきゃいけないのよ！アンタの女になるくらいなら、スモールグールに犯された方がマシよ！」
ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！
「このアマ～…馬鹿にしやがって！！」
俺はその場でクラリスを押し倒し、下着同然のステージ衣装を引き

剥がす！
「きゃ～～～～～～～！！！！！！！」
クラリスの身体に馬乗りになり、左手で両腕を押さえ付け、右手でズボンのチャックを下ろそうとした瞬間、俺の脇腹に強烈な蹴りがめり込んだ！！
ゴドラドが駆け付けオレを蹴り上げた！！
「何踊り子を襲ってんだコラ！！昨晩、フクロにされただけじゃ足りないらしいな！」
アバラが折れ、上手く息が出来ない…
数人の黒服が集まり、俺の事を蹴りまくる！
「２度とこの町に入るんじゃねぇ！！」
そして俺は黒服の捨てぜりふと共に町の外へ捨てられた。
ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！
必ずぶっ殺してやる！必ずだ！！

＜ルラフェン＞

俺はルラフェンという入り組んだ造りの町で暮らしている。
行き交う通行人を襲い金品を強奪して暮らしている。
特に狙い目は若い女だ！
襲い、犯し、奪い、殺す。
この町なら隠れる場所も多く、官憲にも掴まりにくい！

今も、５日前に襲った親娘を、隠れ家の一つで犯しているところだ。
金はあんまり持ってなかったが、良い女だったので隠れ家まで持ち帰ってきた。
特に娘を気に入ってしまった。
まだ１０歳にも満たないのだが、初恋のビアンカによく似ている娘だ。

だが、その娘も先程からぶち込んでいるのに反応が無い…どうやらくたばった様だ…
俺は娘の死体の中に欲望を注ぎ込むと、手近に置いてあったこん棒で娘の頭を叩き潰す！
その光景を見て悲鳴を上げる母親の頭へもこん棒を叩きつける！
性欲を満足させた俺は、今度は食欲を満足させるべく酒場へ繰り出した。
そこで、ここルラフェンより西にある山の滝の裏にある洞窟に、お宝があるとの情報を得た為、俺は一財産稼ぐ気になっていた。

＜滝の洞窟＞

酒の勢いで直ぐさま町を出てしまったが、何とか山も麓まで来る事が出来た。
山の岩壁をよじ登り、滝の裏側にある洞窟を発見。
そのまま洞窟内を探索する。
暫く洞窟内を探索していると、人の声が聞こえてきた…
「あれ！？誰かいる！」
緊張感の無い声…
振り向くと、紫のターバンを巻いたあの男がこちらへ近付いてくる。
「あら？本当ね？船もなかったし、どうやって来たのかしら？」
しかも、ド偉いベッピンを連れている！
この男は本当に腹が立つ！
「おいおい…ヒョロいニィちゃんは女連れで冒険ごっこかぁ？」
俺の女を寝取ったヤローだ！
コイツのせいで俺はヒデー目にあってんだ！
目の前でテメーの女をブチ犯してやる！！
「ここにはお宝があるらしいが、おめぇみてーなモヤシには無理だ

ぜ！」
俺の言葉にシカトして通り過ぎようとしたので、ツレの女の尻を撫でてやった。
これから楽しませてやる事への挨拶代わりだ。
「きゃ！」
「ネェちゃん、良いケツしてんな！そんなヒョロいのじゃ無く、俺のぶっといので良くしてやんぜ！」
俺は自分の尻を押さえこちらを振り返る女に手を伸ばす…次の瞬間！
俺の左頬へ強烈な衝撃が迸る！！
記憶はそこで終わった。
何が起きたのか判らない…

気が付くと俺は数人の荒くれ者共に囲まれていた。
「おう、気付いたか！こんなモンスターもいない洞窟で誰にやられたんだ！？」
左頬が激しく痛い！
どうやらあのヤローにやられた様だ…
「ムカつくヤローに不意打ちを食らったんだよ！！」
俺の言葉を聞き荒くれ共は盛大に笑ってやがる！
笑い事じゃねぇ！ムカつくヤロー共だ！！
「まぁ、いい…この洞窟にお宝があると聞いて来たんだが、その不意打ちヤローがかっさらって行った様だ…何もねぇ！！」
クソッ！あのヤロー…また俺から奪いやがった！必ず殺してやる！
「俺達はカンダタ一家。おめぇー名前は？これからどうすんだ？俺達と来るか？」
カンダタ一家！？
フン！おもしれぇ……
「ああ…俺はジャイー。俺も仲間に入れてくれ…」
「構わねぇーが一番下っ端だって事を忘れんなよ！」
今は下っ端でいてやる…だが、いずれ盗賊団を奪ってやる！

ジャイー一家に変えてやる！！

＜世界の某所＞

俺がカンダタ一味になってから数ヶ月。
俺には盗賊が肌に合っている様だ。
人生最高に幸せな毎日を送っている。

俺達のやっている事は単純だ。
ルラフェンで俺がやっていた事を大規模にした様なもんだ。
町から町へ渡り歩く行商人を襲い、金品を奪う。
女がいれば持ち帰り、全員で死ぬまで犯す！
中には死んでから犯すヤツもいる。

俺達は同じ土地に長居はしない。
一定期間そこで稼いだら、別の土地へ渡り歩く。
カンダタ親分が海を渡りグランバニア地方へ行くと言ってきた。
何やら仕事を請け負った様だ。
何でも何処ぞの王族を殺すのが仕事らしい…
俺好みの仕事なので率先してやる気を見せる事にする。

＜グランバニア地方＞

試練の洞窟と呼ばれる洞窟入口で、カンダタ親分と俺達１０人は身を潜めてターゲットの到着を待っている。
親分が言うには、洞窟の一番奥で殺しモンスターに死体を食わせる必要があるらしい。
めんどくせー事だ…

暫くすると男が一人で洞窟へ入っていった。
紫のターバンを巻いた男…とても王族に見えない男…アレはあの男だ！！
俺から全てを奪った男だ！！ヤローが王族！？
仕事じゃ無くたってあの男を殺してやる！！
今日は最高の日になりそうだ！

俺達はヤローの後を追い洞窟の一番奥まで辿り着いた。
「おっと！ここを立ち去るのは、待ってもらおうか！」
気の抜けた歌を歌っていた男に親分が怒鳴り付ける。
さすがはカンダタ親分…俺に向けて怒鳴っている訳では無いのにも拘わらず、思わず緊張してしまう程の声だ。
「何ッスかぁ？」
しかし、ヤローは緊張するどころか間抜けな返事で返してくる。
「あ！？もしかして…アンコール希望ですか！？う～ん、忙しいので1曲だけなら披露しますけど…」
コイツは王族として生まれ育ち、何一つ苦労することなく育ったに違いない。
我が儘いっぱいに育ったんだ！
許せねぇー！！
「ちげぇーよ！あんたにその証を持って帰られると、困る人がいるんだよ！」
「そう！然る止ん事無い方からの依頼で、オメーを殺しに来たんだよ！」
「うるせーぞ！テメーら！！余計な事言うんじゃねー！」
親分の怒号が飛ぶ。
「あの～…」
しかし男は緊張感無く話しかける。
「おサルさんがどうしたんですか？」

「は？」
何言ってんだ？コイツ！？
「イヤ…さっき、サルがどうのって…」
「然る止ん事無い方だ！誰も動物のサルの事なんか言ってねぇ！」
とんでもねぇ～馬鹿だ！
「あぁ…で、僕を殺して何になるんですか？」
「オメーが王様になるのを阻みたいんだよ！」
俺は自分の気持ちを思わず吐き出した。
「馬鹿だなぁ、君達は…」
馬鹿はテメーだろが！！
「僕の奥さんは妊娠中なんですよ。僕が死んでも、男の子が生まれたら無条件で王様じゃないですか。君達のやっている事は全くの無駄だね！」
「だったら、オメーの嫁さんとガキも一緒に始末すればいいじゃねぇーか！」
そんときゃ俺が犯し殺してやるよ！！
「がははは、ちげーねぇー！」
俺達は揃って大爆笑をしてやった…が、俺の視界に俺の身体が移り込む。
首から上が無くなり、血を吹き出している俺の身体が……
そして何も見えなくなった……いったい何が……？

哀れな男、心の闇、悲しい結末（後書き）

ごめんなさい、こんな内容で…
お叱りを含め、ご感想お待ちしております。

父と娘と男と女？

＜グランバニア＞
リュカＳＩＤＥ

俺は家族団欒を大切にする。
これは転生前からの心がけだ。

今日も朝から家族揃って食事をします。
俺、ビアンカ、ティミー、ポピー、マリー、スノウ、リューノ、ピエール、リューラ。
母さんは４年前（ミルドラースを倒した直後）から、サンチョ夫妻と共にサンタローズで暮らしている。（サンチョとシスター・レミが結婚しました）
父さんの墓の側で生きて行きたいって…
ただ、ここに居たら何時息子に襲われるか分からないから避難するとも言ってました…
さすがに母親は襲わないよぉ！！！

この世界には『休日』と言う概念が無かった為、グランバニアでは強引に作りました。
週休２日制です。
曜日もめんどくさかったので、『月、火、水、木、金、土、日』です。
理由を聞かれたので「エレメントです」って適当な事を言いました。
だって、説明めんどーじゃん！

今日は土曜日です。休日です。みんなまったり朝食です。
ちょ～幸せです！！

なので父親らしくティミーに「彼女の1ダースくらい出来た？」って聞いちゃいました。
14歳になったティミーはイケメンです。
ほっといても食い放題っぽいです。
……でも……
「そ、そんな…居ないよ、彼女なんて…」
顔を真っ赤にして俯いちゃうシャイなあんちきしょうです。
おいおい、跡取り！
大丈夫か？そんなんで！？
「え～、困るよぉ～。たった一人の跡取り息子なんだからさぁ～」
「勝手な期待はやめてよ！沢山娘が居るのだから、そっちで工面してよ！」
あれ？跡を継ぐ気は無いのかな？
「娘は誰にもあげたくないんです！」
「ちょ…人様の娘を何人も妊娠させておいて身勝手だな！」
「ティミー君。男とはそう言うもんだよ」
俺だけじゃないよ。きっと…
「お父さん。ティミーはリュリュの事を忘れられないのよ！」
え～近親相姦！！
「大切な跡取りの為に許してあげなさいよ！その内、駆け落ちしちゃうわよ！二人揃って『出来ちゃった？』とか言って現れるわよ！」
「こらこら！許しませんよ！近親相姦はダメですよ！特にリュリュに手を出したらプンプンですよ！」
「ちょっと、リュカ！なんでリュリュだけなの！？私達の娘はいいの！！」
「ち、違うッスよ！誤解ッスよ、ビアンカねーさん！！僕は娘全員の処女を守りたいんですよ！！」
ビアンカを始め、ママさんズを宥める俺。
しかし、娘の一人から爆弾発言投下！
「私もう処女じゃないけどね」

「……え！？……あの……ポピーさん？」
思考が追いつきません。
「あ！まだ、子供は居ないから安心して」
「当たり前じゃー！！！！！！何処のどいつだー！人の娘に手を出した野郎はーー！！」
「うん。今日、連れてこようか？」
「何でそんなに冷静なのさ！朝っぱらから重大発言ですよ！？」
「ほら…私、お父さん似だから！」
何でこの双子、性格が逆じゃないの？世の中間違ってます！
「……そいつの親も連れてきなさい！！責任取らせてやる！」
「うん！じゃ、今から行って来るね！あ、ティミーも手伝ってよ」
「ちょ、僕を巻き込まないでよ！」
「何言ってんの！私の初体験が何時だか知ってて黙ってたでしょ！同罪よ」
「な、ティミー！お前…「いってきまーす！！」
脱兎の如くポピーの手を引き出て行くティミー…
学校なんかに通わせるべきではなかったんですか？
娘を持つ父親とは、こうも辛いものなのですか？

リュカＳＩＤＥ　ＥＮＤ

＜ラインハット＞
ティミーＳＩＤＥ

ラインハットに着くなりポピーは勝手に別行動。
きっとコリンズ君とイチャつきたいのだろう…
僕はデール陛下とヘンリー陛下にご挨拶に赴く。
「お！？ティミー君じゃないか！どうした、またリュカを探しに来

たのか？」
ヘンリー陛下は凄い。
よく、あの父と友人付き合いを続けて行けるものだ…
「こんにちはヘンリー陛下。今日は違います。ポピーの付き添いです」
・
・
・
3時間後だった…
ポピーとコリンズ君が現れたのは…
しかも…

ティミーＳＩＤＥ　ＥＮＤ

＜ラインハット＞
コリンズＳＩＤＥ

（バン！！）
ノックもなく俺の部屋のドアが叩き開けられる！
「な、何ご…むぅ……！」
現れたのはポピー。
部屋に入るなり俺を押し倒しキスをする！
イヤじゃないんだけど…基本、主導権を握られっぱなし！
2年前に初めてエッチをした時から…
あの時に大好きな女の子に強引にキスをした事が全ての原因だ。
確かに無理矢理キスをしたのは俺だ！
だが、その先はポピー主導だった！
俺の服を力任せに脱がし押し倒された。
キスだけのつもりだったんだけど…

・
・
・
「今日は朝から何なんだよ。」
一通り終わり、俺は服を着直しながら訪ねる。
ベットでは服を開けさせたままのポピーが横たわる。
顔を赤く上気させ俺を見つめるポピー。
もう一度服を脱いじゃおうかなっと思った時、今日来た目的を語り始めた。
「お父さんにバレちゃった」
絶対嘘だ！
バレたんじゃない、バラしたんだ！！
「お父さんに連れて来いって言われたの。だから行こ？」
確かに、何れはご挨拶に赴かなければいけないと思ってました。
でも……でも！！
「…それとも…私とは身体だけの関係？」
ベットで身体を起こし瞳を潤ませ問いつめるポピー。
本当に可愛いんです！大好きなんです！
「そんな事はない！俺はポピーの事を愛している！！」
俺は本心から答えた。
何れが今になるだけさ！
「本当！嬉しい！親も連れて来いって言われたから、早速ヘンリー様の所に行きましょ！」
え～！！！！父上と一緒に～！！！！
ポピーは俺の答えを待たず…服も着直さず、俺の腕をひっ掴み父上の元へ連行する。
俺は慌てて落ちていたポピーのパンツを掴む。
そしてズルズルと引きずられて行く…

コリンズＳＩＤＥ　ＥＮＤ

＜ラインハット＞
ティミーＳＩＤＥ

「ポピー…なんて恰好を…」
コリンズ君を引きずる様な形で二人は僕達の前に姿を現した。
ポピーの恰好は最悪だ！
ブラウスのボタンは全て外れ上半身を隠そうとしない。つまりオッパイ丸見えだ！
下半身はスカートの為、大事な部位は隠れているが太腿から液体が滴り落ちる…
コリンズ君の手には白い布が…きっとポピーのパンツだ…
この恰好で城内を歩いて来たのか！？
僕はポピーのブラウスのボタンをはめ、恰好を正させる。
コリンズ君に目を向けると、バツが悪そうにヘンリー陛下と対峙している。
「コリンズ…お前…よりによってアイツの娘に…」
ヘンリー陛下、ぐったりしてる…
「そうなんです、ヘンリー様！私、コリンズ君に手ぇ出されちゃいました。しかも、その事が今朝お父さんにバレました」
間違っちゃいないが正しくもない。
「親と一緒に連れて来いって言われたので、これから一緒に来て下さい！」
「……分かった……」
「…父上…その…済みません…」
落ち込む親子と、満面の笑みのポピー。
何時からこの状況を画策してたのだろうか？
ラインハットへ来て、いきなりコリンズ君とシたのも、半裸でヘンリー陛下に会ったのも、ワザとだろう…

酷い女だ！

絶対こんな女、彼女にしたくない。

ティミーＳＩＤＥ　ＥＮＤ

父と娘と男と女？（後書き）

自分の事は棚に上げる男、リュカ！
とうとう彼に天罰が！！
…天罰か？これ？

父と娘と男と女？（前書き）

トラブルメーカー、ポピー伝説とでも名付けたい気分です。

父と娘と男と女？

＜グランバニア＞
ビアンカＳＩＤＥ

昼も過ぎ、リュカは娘達相手に本を読んであげている。
母親が複数居る事を除けば微笑ましい風景だ。
「ただいまー！連れてきたわよー！」
ポピーを先頭に、疲れ切ったティミーが入ってくる。
そして……その後ろからヘンリー様！？嘘！！？
「な！！？まさかヘンリーがポピーに手ぇ出したのか！！？」
驚愕の表情で立ち上がるリュカ。
「お、俺じゃない！お前と一緒にするな！！…俺の息子だ！お前の娘の相手は…」
よく見ると更に後ろから躊躇いがちに入ってくるコリンズ君が…
「あの…お、お久しぶりです…リュ、リュカ陛下…」
「……」
心底困っている様子のリュカ。
こんな表情初めて見るかも…
「……コリンズ君……」
名を呼ばれビクッと身体を震わすコリンズ君。
かなり緊張している様ね…当たり前か…
「……はぁ……で…僕の娘の具合はどうでしたか？」
えぇ～！！！？
「ちょっと、リュカ！最初の質問がそれってどういう事よ！」
「だって気になるじゃん！ヤっちゃったもんはしょうがないし…取り返しのつかない事だし…」
だからって…
「最高に決まってるでしょ！私なんだから！！」

ちょっとポピー…
「何なんだこの親娘は！？」
ヘンリー様の言葉に反論できない。
「コリンズ！お前本当にこの娘で良いのか？」
言葉は辛辣だけど表情は笑顔…親友の娘って事で嬉しいみたいね。
「……リュカ陛下！い、いえ…お義父さん！」
コリンズ君、声裏返ってるけど真剣な様ね。
「娘さんを…ポピーを僕にください！必ず幸せにしてみせます！」
さすが男の子！良く言ったわ！
ポピーも嬉しそう。
「え～…ヤダ～…」
はぁ！？
この流れ、違うでしょ！！
優しく容認するのが父親でしょ！！
「あら！じゃぁ…セフレ決定ってこと！？まぁ、お父さんの周りにも居るからねぇ…結婚はしてないけど子供を産んだ女性が沢山…それと同じって事ね！」
「それもヤダ！」
「勝手ねぇ～…じゃぁ、どうすればいいのよ！」
「コリンズ君はどうすればいいと思う？」
「え！？お、俺ですか…！？えっと…あ、あの…」
あ！リュカとポピーの表情が人の悪い表情に変わった！
二人とも碌な事を考えてないわ！
「どうやらコリンズ君はポピーの事を愛してはいないらしい！」
「違…「どうせアレだろ！ポピーの方から襲う様な形でヤちゃったんだろ！？」
うん。この場にいるみんなが頷いた。
一人を除いて…
「お父さん！そんな事無いよ！コリンズ君は真剣なんだ！僕、相談された事もあるんだから！」

ティミーは良い子ね。
親友を庇ってる。
でもね…リュカとポピーには通用しないわ。
その事も計算済みのはずよ。
「（ゲラゲラ！！）彼女もいない童貞のお前に相談している時点で大して本気じゃないって事だよ！！」
ほら！被害が増した。
「うっ！…た、確かに僕に相談しても力にはなれなかったけど…コリンズ君は真剣だよ！それだけは間違いない！！」
煽られる形で擁護するティミー。
まだまだ役者不足ね！リュカには敵わない。
「お義父さん！俺は本気です！！本気でポピーを愛してます！この世界の何よりも！」
ムリね…相手が悪い…そんな事じゃ、この泥沼からは抜け出せないわ！
「口じゃぁ何とでも言えるよ。僕なんかは死にそうな試練を受けて、合格して他の女性と結婚できる様になったにも拘わらず、その女性を蹴ってビアンカと結婚したからね！僕の…口だけじゃない愛の証明さ！」
言っている事は格好いいけど、やってる事は娘の恋人を苛めているだけだから…
しかも、その娘も楽しんでいるし…
何考えてるの、あの娘？
「つまり、そんなお父さんの上を行けば良いのね！お父さんに勝てれば良いのね！！」
「え！？…ま、まぁそう言う事だけど…勝つってどういう意味？」
「そのままの意味よ！お父さんと戦って勝つ！首洗って待ってなさい！このヒョロ男を、最強の剣士にレベルアップさせてくるから！」
「ちょっと、戦うってそう言う意味！！僕、ヤダから！乱暴事、ヤダから！！」

「そっちの都合なんて知らないわよ！ほら、行くわよダーリン！ティミーも来なさいよ！！！親友のピンチでしょ！！」
そう言うとポピーは、ティミーとコリンズ君の手を引いて出て行ってしまった。

「お前…娘にどういう教育をしてるんだ？」
「どうって言われても…」
「今朝、俺の前に半裸で現れたんだぞ！コリンズとの事の後に…」
間違いなくポピーはリュカの娘ね！
マリーに悪影響が出なければ良いけど…

ビアンカＳＩＤＥ　ＥＮＤ

＜サンタローズ＞
リュリュＳＩＤＥ

先程、ティミー君とポピーちゃんが見知らぬ男の子と一緒に、サンチョさんの家に入って行きました。
？今日はお父さん来てないけど…
気になったので私も行ってみよ。

中では一人楽しそうなポピーちゃんが、マーサお祖母様に何かお願いしている最中でした。
「あ…ティミー君…こんにちは。今日はどうしたの？」
「あ！リュリュも聞いてよ！お父さんが、私とダーリンの交際を認めてくれないの！」
絶対嘘だ！
きっと自らこう言う状況にしたに違いない！
だって目が楽しそうだもん。

「あの…初めまして、リュリュです。ティミー君とポピーちゃんの腹違いの妹です」
「あ、どうも。コリンズです」
はぁ……きっと、ティミー君とコリンズさんは被害者ね。
・
・
・
話は大体分かったわ…
主犯格が二人、お父さんとポピーちゃん。
被害者はその他全員。私も被害者の一員に加わってしまった様だ。

「…で、ポピーは私に何を頼みに来たのですか？」
「はい、お祖母様！魔界へのゲートを開いて下さい。」
「……はい！？」

リュリュSIDE　END

父と娘と男と女？（後書き）

お忘れかもしれませんが、
マーサは魔界へのゲートを開ける力を持ってます。
だから攫われたんです！
ご都合主義じゃありません！

父と娘と男と女？

＜魔界＞
リュリュＳＩＤＥ

何故だか私も魔界へ来ています。
簡潔に説明すると…
お父さんとコリンズさんが決闘をする事になりました。
でも、コリンズさんは弱いのでポピーちゃんは鍛えるつもりみたいです。
鍛えるのにもってこいの場所とは魔界。（ポピーちゃん極端です）
コリンズさんだけじゃ不安なので、ポピーちゃんとティミー君が同行。
そして心配してくれたお祖母様も同行。
さらに私と私のお友達モンスターも強制同行されました！
『ドラキー』のドラきち、『メタルスライム』のメタリン、『はぐれメタル』のはぐりん、『アークデーモン』のアクデンです。
私じゃ戦力にならないと言ったんですが…
「大丈夫！お父さんの娘なら立派な戦士よ！」
と言って『誘惑の剣』をプレゼントされました。
「男を惑わす貴女にピッタリ」って…
酷い言われ様です。

お父さん達は、こんなに空気の重い場所を旅していたの！
やっぱり凄いわ！
でもティミー君が「魔王が居なくなったから少し緩くなったよ」って…
今のこの状態でも私には苦しいのに…
私きっと足手纏いになる…

私…帰りたいです…

リュリュＳＩＤＥ　ＥＮＤ

＜魔界＞
ティミーＳＩＤＥ

「アンタ馬鹿じゃないの！」
ポピーが小声で失礼な事を言ってくる。
何なんだいきなり！
「リュリュを脅かしてどうすんのよ！」
「え！？そんなつもりは…ただ、本当の事を…」
「だから、アンタ彼女が出来ないのよ！」
本当、失礼な女だ！！
「そう言う時は『大丈夫だよリュリュ。僕が守ってあげるよ！』って言うのよ！そうしたらリュリュ、ティミーにメロメロよ！」
どうしてもリュリュと僕をくっつけたい様だ。
「何だ、ティミーは妹に惚れてんのか？ポピーには手を出すなよ！俺の彼女だ！」
「頼まれたってあんな性格の悪い女に手は出さないよ！」
ポピーとコリンズ君はクスクスと笑っている。
腹立つなコイツ等…
お前等のせいで酷い目にあってんだぞ！自覚しろ！！
「ほら！恐怖に震えるお姫様の元へ行けよ。『僕が居るから安心だよ』ってさ！」
僕はコリンズ君に押される形でリュリュの元へ赴いた。
「リュ、リュリュ…大丈夫だよ。どうせあの二人、すぐに挫折して帰ろうって言い出すよ」
僕は笑ってリュリュの手を握る。

柔らかい手、そしてとても良い香りがする…リュリュ…本当、可愛いなぁ…
アクデンが僕とリュリュの間に割り込み前進を促す。
「リュリュ様！我々も居ます。どうかご安心を！」
アクデンに目で『手を出したら殺す』と脅されました。
何奴も此奴も……

魔界の平原を突き進む。
襲い来るモンスターは皆強敵！
コリンズ君ではかすり傷一つ付ける事はムリだろう…
ここに来た意味あんの？
ジャハンナで『吹雪の剣』を入手し装備をしているが役に立たない。
僕はコッソリとポピーに話しかける。
「なぁ…コリンズ君はどんなに頑張ったってお父さんに勝てる見込みは無いぞ！」
さすがに本人には言い辛い。
「そんなの分かってるわよ！勝負度胸を付けさせる為に来たの！黙って護衛してなさいよ！」
本当、いい迷惑だ！
「あの～…妙な気配がしますが…ここは何でしょうね！？」
リュリュが地面に出来た亀裂を覗き込み大声をあげている。
以前に来た時には無かったが…
亀裂は深いダンジョンになっている様だ。
「よし！これも修行よ、行きましょダーリン？」
コリンズ君、もう泣きそうだ！
でも、この状況で逃げ出さない…泣き言を言わない…本当にポピーの事を愛しているんだな…
ちょっと羨ましいなぁ…そう言う相手が居て…
ポピー相手じゃ絶対ヤダけど！

ティミーＳＩＤＥ　ＥＮＤ

＜謎の洞窟＞
マーサＳＩＤＥ

なんと魔界には私の知らないダンジョンが出現してあった！
襲い来る敵の強さが半端じゃない！
それでもティミーとポピーの連係攻撃はさすがだ。
リュリュも善戦している。
誘惑の剣を振るい戦う姿は、まるでワルキューレだ。
並の戦士より、遙かに強いだろう。
また、リュリュはモンスター達とも良いコンビネーションである！
しかしコリンズさんは戦闘へ参加する事が出来ないでいる。
当たり前だ…レベルが違いすぎる。
彼がここの来た意味が全く分からない。

そんな事を考えながら進んで行くと、正面に強烈な殺気を放っているモンスターが1体こちらを睨んでいる。
「我が名はヘルバトラー！地獄の帝王エスタターク様の僕である！！」
『地獄の帝王エスターク』！？
ミルドラース以外にもこの様な魔族が居ると言うの！？
「貴様等は何用でここまで来た！？我が主は永き眠りよりまだ覚めておらぬ！我が主を害しに来たのか！？」
「いえ…「そうよ！正義のヒーロー、天空の勇者様と愉快な仲間達が、地獄の帝王エ、エ、…エクスタシー？…を成敗に来たのよ！」
ティミーの言葉を遮ってポピーはヘルバトラーを挑発する。
「エクスタシーではない！エスターク様だ！！間違えるな小娘！！」
ヘルバトラーは逆上し襲いかかってくる！
ポピーはヒラリと攻撃をかわし後方へ退がる！

父親と同じ動きだ…
ヘルバトラーは激しい炎を吐き辺りを火の海に変えるが、ティミーのフバーハで私達は殆どダメージがない。
ポピーのマヒャドがヘルバトラーへ襲いかかり、ティミーのギガデインがトドメを刺す。
「ぐぅぅ…この様な子供に遅れを取るなど…」
崩れ落ちるヘルバトラー…
しかし、満身創痍になりながらも、再度立ち上がり我々と対峙する…
「わ、私は負ける訳には…エスターク様をお守りせねば…」
気迫で立ち上がるヘルバトラー。
ティミーが剣を構え、踏みだそうとした瞬間！
「やめてください！！」
リュリュが二人の間に割って入る。
「バトラーさん。本当は私達、エスタークさんを倒しに来た訳じゃないの…ここには迷い込んじゃっただけなの…エスタークさんが私達人間に危害を加えないのなら、私達はここから出て行きますから…」
「何言ってんの、リュリュ！地獄の帝王よ！ミルドラースみたいに人間を滅ぼそうとするに決まってるでしょ！」
「ポピーちゃん……そ、そんな事聞いてみなきゃ分からないじゃない！」
「じゃ、聞いてみましょうよ！」
「「「「「え！？」」」」」
「ちょっとおっさん！そのエステティシャンの所に案内しなさいよ！直接聞くから！！」
「エ、エスターク様だ！間違えるな！！」
「ごめんなさい、バトラーさん。直接聞いて、私達に害は無いと分かったら大人しく帰るから…」
リュリュはヘルバトラーに優しく『ベホマ』を唱える。
リュリュを見て驚いた顔をするヘルバトラー。

「良かろう…付いて来るがよい…」
まさか本当に連れて行ってくれるとは…
ポピーが言っていたけど、リュリュは男を惑わす魔性の女ね…
無自覚だけど…

マーサＳＩＤＥ　ＥＮＤ

父と娘と男と女？

＜謎の洞窟＞
ティミーＳＩＤＥ

僕達の前には禍々しい妖気を放つ異形が大きな玉座に座り眠っている。
「寝てるし害は無さそうだから帰ろ！」
小首を傾げ帰る事を促すリュリュ。
可愛いです…本当、可愛いんです、リュリュは！
「ダメよ！聞いて確認するんだから！！ちょっとおっさん！さっさとエスエムクラブを起こしなさいよ！！」
「エスターク様だっつてんだろが！！」
そう言えばお父さんも、ああやって相手を挑発してたっけ…
「あの…バトラーさん。ポピーちゃん、ワザと間違えてるの、そうやって相手を怒らせるのが目的なの。だから無視して」
「う、うむ…すまぬ、大声を出してしまって…」
リュリュは優しいなぁ…
「う〝う〝う〝う〝…私の眠りを妨げるのは誰だ……」
ヘルバトラーの大声でエスタークが目を覚ましてしまった。
「このおっさんよ、騒いでたのは！大声を出してたのは！！」
本当に僕と双子なのか！？こうも性格が違うものなのか？
「貴様か！！」
「も、申しわ「そんな事よりも！」
怒りの矛先をヘルバトラーに固定させたまま話を続ける性悪女。
「そんな事より、アンタの目的って何？」
「目的…？」
「起きたら何するかって聞いてるの！『朝食を食べる』とかのギャグはいらないからね」

「目的…起きたら…？」
何か悩んでるぞ…
「あの…人間を滅ぼしたりしませんよね？」
「う〝う〝う〝…思い出せぬ…私は何故存在しているのか…？」
「何よ！地獄の帝王じゃ無いの？人間界を滅ぼしてやるぅ～とかじゃないの？」
「…滅ぼされたいのか…？」
「ふざけんじゃないわよ！！やられる前にやるのが私の主義よ！！」
「よかろう！貴様等を滅ぼしてから考える事にしよう！私の存在意義を！」
はい。誰がどう見ても、こっちからケンカ売ってました。
エスタークの激しい炎が最も近くに居たリュリュに迫り来る！
慌ててフバーハを唱えたが間に合わない！！
「きゃー！！」
……
しかし、リュリュは無事だった！
寸での所でヘルバトラーが身を挺して庇ったのだ！
「エ、エスターク様！お止め下さい！」
「やはり貴様も敵か！滅ぼしてくれよう！！」
「酷いです、エスタークさん！バトラーさんは味方なんですよ！それなのに…」
「黙れ！！ここに居る者、皆敵だ！滅ぼしてやる！！」
聞く耳を持ってない様だ。
「リュリュ、無駄よ。寝起きで機嫌が悪いのよ！ぶっ飛ばしちゃいましょ！」
リュリュはヘルバトラーにベホマをかけ後方へ退がった。
その間にも僕等は、絶え間なくエスタークへ攻撃を仕掛ける！
「少女よ…何故私を回復する…？私は敵だぞ…」
「（ニコ）私に敵は居ません。私を庇ってくれたバトラーさんは、私のお友達です。」

あの笑顔に勝てる男は居ない…
「……少女よ、名は…？」
「リュリュです、バトラーさん」
「ふむ、リュリュよ！友達同士に『さん』付けは不要！」
やはり落ちたか…
「では、眼前の大敵を倒そうではないか！」
ヘルバトラー改めバトラーも加わり、僕達はエスタークを追いつめて行く。
・
・
・
激闘…まさに激闘の末、エスタークは倒れ崩れ去る…
「アレ何かしら？」
エスタークが消え去った跡に、直径７０センチぐらいの卵のような物体が現れた。
「た、卵？」
「きっとエスターク様がお守りしていた物であろう…エスターク様の子供…」
「何！？アイツ女だったの！？」
「エスターク様に男女の概念は無い！」
「ふ～ん…ま、どっちにしろ叩き割っちゃいましょ！」
ポピーは手にした『ストロスの杖』を卵に向けて振りかぶる。
「ダメー！！！」
しかしリュリュが慌てて卵を庇った！
「ちょっと退きなさいよ！また、あんなのが生まれたら厄介でしょ！今の内に…」
「ダメです！まだこの子は何も悪い事をしてないのよ！なのに生まれる事すら許してもらえないなんて…可哀想です……」
リュリュは卵を抱き抱え蹲る。
あぁ…あの卵になりたい…

「じゃぁ…リュリュが責任持って育てるのね！」
「はい」
優しく卵を抱き立ち上がるリュリュ。
「よし！帰りましょう。もう、疲れたし、汗だくだし、ダーリンは一人震え上がってるし…」

僕達はポピーに続きダンジョンを出口へ向かい歩いて行く。
「なぁ…何一つ、目的を達して無いんじゃないのかなぁ？」
徒労に終わったこの冒険を嘆く様に呟いた僕。
「何言ってんの！？目的は達したじゃない！」
「どの辺が？」
「お父さんより上に行ったわ！」
「上？」
意味が分からん。
「そうよ、私達だけで地獄の帝王を倒したのよ！ダーリンが指揮する私達だけで！」
酷い言い分だ！
それで押し通すつもりなのか？
あのお父さんが認めるのか？
……まぁ、いい。
兎に角疲れた…帰りたい…

ティミーＳＩＤＥ　ＥＮＤ

＜グランバニア＞
マーサＳＩＤＥ

私達がグランバニアへ着いた時には既に日も暮れ、大きな満月の輝く夜になっていた。

中庭ではリュカがドラゴンの杖片手に佇んでいる。
こうして黙っていると格好いいのに…
「随分遅かったね。少しは強くなったのかな？」
リュカはコリンズさんを優しく見据え語りかける…
「お父さん。私達はお父さんの上を行ったのよ！」
「上？」
「そうよ！地獄の帝王エ、エ、エス…なんとか？を倒したのよ！」
「エスターク様だ！」
「へー…ご苦労さん。で、それとコリンズ君とどんな関係が？」
全く関係無いわ。
「ダ、ダーリンの指揮の元やっつけたの！だから、ダーリンは強いの！」
「じゃ、試してみますか…」
リュカは分かってて苛めてるのね…
「お父さん。僕が相手をします！」
え！？何で？ティミーは関係ないでしょう！
「可愛い（？）妹と、親友の幸せがかかってます。僕がお父さんに勝てたら、二人の結婚を認めて下さい」
リュカの顔がウンザリした表情になった。
『ヤベ、やりすぎた！さっさと認めれば良かった！』って顔ね。
でも、今更引けないわね…父親としての威厳があるものね！
「お父さん！行きます！！」
ティミーの天空の剣がリュカに襲いかかる！
しかしリュカは難無くかわすと、ドラゴンの杖で反撃をする！
激しい打ち合い！
両者とも一歩も引かない！
だが、余裕があるのはリュカだ！
ティミーは渾身の力で打ち込んでいるのに対し、リュカは涼しげな表情で全てを去なす。
「メラ」

あらぬ方向からのメラに慌てて避けかわすリュカ！
メラを唱えたのはコリンズさんだった！
「お義父さん！俺は卑怯と言われても貴方を倒す。ポピーと結ばれる為に！！」
「ヒャド」
今度はポピーが唱えた。
「バギ」
リュカはヒャドをバギで打ち消す。
「魔王より強いお父さんだもの…みんなで攻撃したって卑怯じゃないわ！」
「ポピーは僕の事をそう言う目で見てたのか…」
「うん。お父さん大好き！」
「今言う台詞じゃ無いよ」
苦笑いするリュカ。
「うん。私も大好きよ、お父さん！」
大きな卵を小脇に抱え、剣を構えるリュリュ。
何でこの子はこんなに好かれているのだろう？
我が子ながら不思議だ？
「……（クス）分かった分かった！降参だ…」
リュカは杖を納め城内へ向かい歩いて行く。
「ともかくお前等全員風呂は入れ。汗臭いぞ！！」

「おめでとう、ポピー。認められたわよ！」
「うん！マーサお祖母様、ありがとう！」
？ポピーはまだ、納得をしてない様だ？
まだ何かあるの？

マーサＳＩＤＥ　ＥＮＤ

父と娘と男と女？（後書き）

今回難産でした…

父と娘と男と女？

＜グランバニア＞
ティミーＳＩＤＥ

自室に天空の剣を置き、みんなの所へ戻ろうと廊下を歩いていると、ポピーとコリンズ君に文句を付けられた！
「アンタ尋常じゃないくらい汗臭いわよ！私に遠慮しないでいいから、先にお風呂へ入りなさいよ！」
失礼なのか優しいのかよく分からない…
「俺達はもう一汗かくから、先どうぞ！お前はもう汗かく事ないだろ！？」
はい。失礼なだけでした。

お言葉に甘えて（？）先に入る事にした。
脱衣所で服を脱いでいると、浴室に先客の気配が…
脱衣籠には紫のターバンが…
（ガチャ）
僕の後ろで浴室への扉が開く音がした。
慌てて振り向く…
その時僕は、時間が止まる事を心から祈った…
そこにいたのは驚いた顔のリュリュ！
濡れた黒髪、細い体に反比例する大きな胸、括れたウエスト、そして…
手を伸ばせば届く距離に裸のリュリュが居る！
風呂上がりのリュリュは色っぽい…
どうすればいいのか、どうしたらいいのか、分からない……
リュリュの視線が僕の腰に向かう。
僕もつられて視線を移す…

！！！
僕は裸だった！
慌てて脱いだ服を掴み股間を隠す！
「ごめん！！し、知らなかったんだ！！ごめん！！」
しどろもどろになりながら脱衣所から廊下へ逃げ出す！
壁にもたれかかり大きく深呼吸をする…
「……ったく！ヘタレねぇ～…」
「あんな美味しいエサを前に逃げ出す意味が分からんな！」
廊下では事の次第を見守るバカップルが１組…
「お、お前等…！リュリュが入浴中なの知ってたな！」
「知ってたに決まってるじゃない！」
「な！ふ、ふざけるな！！」
「ふざけてないわよ！私達の為に、お父さんに立ち向かってくれた優しい兄へ、お礼をしたかっただけよ！」
「そうだぞ！ヤったもん勝ちだぞ！」
何で僕はコイツと親友なんだ？
「あのねぇ～…何れリュリュにも彼氏が出来るのよ！それを指くわえて見てるの？どっかのバカ男に犯されちゃうのよ！いいの！？」
ぐっ！
正直…良くない…！
でも、リュリュの自由を束縛する権利は僕にはない！
「お前等の言い分だと、リュリュの心を無視してる！」
「心なんて後から付いてくるわよ！」
「うるさい！いい加減にしろ！僕とリュリュは兄妹なんだ！そう言う関係になるつもりは無い！」
「兄妹が何よ！血の繋がりが何だって言うのよ！そんなの気にする必要無いわよ！好きな人と結ばれるのが良いに決まってるじゃない！」
「だったら僕はリュリュの気持ちを優先する！リュリュが好きな人と結ばれる事を祈る！リュリュが僕の事を好きだったら、お前等の

誘いに乗ってやる……が、それが分からない以上この話は終わりだ！！」
僕は一気に捲し立て二人を恫喝する。
「……（プッ！）裸でチンコ隠してなければ格好いい台詞なのに…その姿じゃぁ…」
こ、この女は～！！
（ガチャ）
脱衣所の扉が開き、リュリュが姿を現す。
「ごめんねティミー君。…どうしたの？随分騒いでたでしょ！内容は分からなかったけど、ティミー君の声聞こえたわよ！」
「な、何でもないよ！！気にしないで…」
僕は慌てて誤魔化した。
こんな内容話せる訳がない！
「…うん…分かった…あの、ティミー君…」
リュリュは納得してないのか、俯き口籠もる。
「何？どうしたの？」
「あ、あのね…ティミー君さっき…自分の服掴んで出て行った時にね…あの…私の…パンツ…一緒に持って行っちゃったの…」
……
「何アンタ！？妹のパンツ、股間に押し当ててんの？どんだけ変態なのよ！？」
「ご、ごめん！！い、今か「ティミー君！落ち着いて！兎に角脱衣所へ入ってからでいいから」
僕は慌てて脱衣所に入る！

「…で、ティミー！パンツは返したの！？変な事に使わなかった？」
ポピーの台詞でリビングのみんなが僕を見る。
「か、返したよ！」

返したけど…ちょっと変な事に使ってしまいました…ごめんなさい…
「ポピー！ティミーを苛めるのはヤメなさい！純情男子なんだから！」
お父さんにフォローされた…屈辱です。
「それよりリュリュ！お父さんはパンツよりも、その抱いてる卵の方が気になるのだが…？」
「だから言ったでしょ！地獄の帝王エロティックよ！」
「も、いい加減にして！エスターク様だから！」
バトラーが涙目だ…可哀想…
「アンタもいい加減分かりなさいよ！ワザとだっつーの！」
何でコリンズ君はこんな女に惚れたんだ？
「ちょ、まって…さっきの地獄の帝王の件って本当だったの！？」
「お父さん本当なの！そして、この卵がエスタークさんの子供なの」
「何でそのエスニックの子供を、持って帰って来ちゃったの？」
「こ、この親娘は～……」
怒りに震えるバトラーを無視してお父さん、ポピー、リュリュは話を進めてく。
「だってポピーちゃん、この卵を壊そうとするのよ！」
「何言ってるの！地獄の帝王よ！人間を滅ぼそうとするかもしれないじゃない！」
「そんなの分からないじゃない！…あんな洞窟の奥に一人で居たら、性格も歪んじゃうかもしれないけど、みんなで仲良くすればお友達になってくれるわよ！」
リュリュは優しい良い子だ！
「うん。お父さんもリュリュの意見に賛成だ！将来邪魔になるからって殺してたら、光の教団の魔族達と同じだよ」
確かにその通りだ…まだ幼い勇者を捜す為に世界中の子供を攫って奴隷にしてたんだ…
お父さんも被害者の一人だ！
「むぅ！…分かってるわよ！リュリュが正しい事は…」

ポピーは頬を膨らませむくれる。
あ！ちょっと可愛いな！
「お父さんアレでしょう！私に彼氏が出来て処女じゃなくなってるから、私の意見に反対するんでしょ！」
「おいおい…酷いなぁ…確かに、父離れをした非処女の娘より、悪い虫の付いてない処女の娘の方が可愛いけど…」
言わないよ普通！本人達の前で、娘達の前で、母親達の前で…そう言う事言わないよ！
「何よ！分かんないじゃない！もう、処女じゃないかもしんないじゃない！男、沢山侍らせてるかもしんないじゃない！！」
「わ、私まだ処女です！！」
思わず叫んでしまい顔を赤くして俯くリュリュ…
よ、良かった～…リュリュまだ処女だったぁ～！
「何、ホッとした面してんだ！」
コリンズ君が小声で話しかける。
「うるさい、黙れ！」
ニヤけ顔のコリンズ君がムカつく！
「なに？彼氏の一人も居ないの？」
「居ません！」
「好きな男性は？」
「好きな人は…居ます…」
何！？誰だ！？誰なんだ！？
「ねぇねぇ！誰よ！？教えなさいよ！もしかして…『お兄ちゃんが好き？』なんて言う？」
だったら嬉しい！本当に嬉しい！
僕も告白してしまう！
「おしいけど違います…」
え！？
「じゃぁ誰よ！」
もういい！ポピー、もういいから！！ヤメロ！聞きたくない！！

「…お、お父さんが好きです？」
……
「また、アンタか！！！」
思わず叫んでしまった…
分かってる…理性では分かってるのだが…
「ど、どうしたのティミー君！？」
驚くリュリュ…
「し、失礼…でも、何でお父さんはそんなにもてるんですか！？チャランポランで、至る所で愛人つくって、子供までつくって…」
「あはははは！1個も言い返せない！でも何でだろうね？」
このチャラいノリがイラつく！
「ご、ごめんね！ティミー君が怒るとは思わなかったから…ごめんなさい…」
「いや…リュリュのせ「しょうかないのよリュリュ！ティミーはリュリュの事が大好きなのよ！」
「え！？そうなの？」
「……はい……初めて会った時からずっと…」
こんな形で告白するなんて……
「やっと告ったか！このヘタレめ！」
僕はポピーを睨み付ける。
「ヘタレも何も、兄妹なんだぞ！告れるわけないだろ！」
「何で兄妹だと告れないのよ！？兄妹だろうが親娘だろうが、好きだったら好きって言えば良いのよ！」
「い、言えるわけないだろ！！」
「そうよね、アンタには言えないわよね！『兄妹だからそういう関係にはなれません！』って断られたらイヤだもんね！」
そうだよ！兄妹なんだよ！僕等は…
「守りに入ったムッツリスケベだからもてないのよ！何も言わず、何も言えず、ただひたすら思い焦がれているからもてないのよ！」
「あのねティミー君。私、魔界へ行った事で分かったの。お父さん

が格好いい訳が」
え！？お父さんは一緒に行ってないのに？
「魔界ってね、凄く空気が重くて怖い所だったの。でも、お父さんが一緒だったらきっと怖くなかったと思うの。いつもの様におチャラけた雰囲気で和ませてくれると思うの」
「そうなのよリュリュ！私達お父さんと旅をしててダンジョン内で怖いと思った事ってそんなに無いの！お父さんが居るってだけで安心感があったのよ！」
確かに…いつも安心感はあったけど…
「ティミー君は真面目だけど…真面目すぎるの！でも、そこがティミー君の良い所だから落ち込まないで、元気出してね！」
あぁ……
今日は散々な1日だ……
もう疲れた……
リビングでは僕のヘタレっぷりで話が盛り上がっているが、僕はもう寝ます……
・
・
・
朝起きたら、枕の横にパンツと一緒に1枚のメモが…
『元気出してね、お兄ちゃん。私の脱ぎたてパンツを好きに使っていいからね！最愛の妹ポピーより？』
……
アイツ大嫌いだ！！！

＜グランバニア＞
リュリュSIDE

ティミーSIDE　END

昨晩はグランバニアにお泊まりしました。
やっぱりお父さんは王様なんですね…
ベットが凄く柔らかいです。

朝起きたら、卵にヒビが入ってました！
壊れちゃったのかと思ったけど、中でカタカタ音がします。
生まれる寸前の様です。
みんなに知らせようと、卵を持ってリビングルームへ行く途中、大声で怒っているティミー君に遭遇！
凄い勢いでポピーちゃんの部屋に怒鳴り込んで行きました。
でも、すぐに顔を真っ赤にして出てきちゃったの。
私もちょっと中を覗いて見たら、コリンズ君とエッチしている最中でした！
鍵くらい閉めればいいのに…

私は気を取り直してお父さんに報告！
「卵から赤ちゃんが出てきそうなの！」
「うん。可愛いのが産まれると良いね」
お父さんは優しく頭を撫でてくれました。
お父さん大好きです。でも、親娘だから結婚は出来ないんだよね…
残念です。

暫くして卵の中からエスタークさんを小さくした子供が産まれました。
お父さんがそれを見て、
「可愛くないなぁ～」
だって。
そうしたら小さいエスタークさんが、
「何でしゅか！しょの言い方は！初対面で失礼でしゅよ！」

って。
私は可愛いと思います。
協議の結果『プチターク』に名前が決定しました。
ビアンカさんのネーミングセンスって可愛いです。

あぁ、楽しい1日だった…
また、みんなと一緒に冒険したいなぁ…
今度はお父さんと一緒がいいな！

リュリュＳＩＤＥ　ＥＮＤ

父と娘と男と女？（後書き）

可哀想なティミー君に励ましのお便りを！

リュー君のお仕事？（前書き）

何か思いついたので書きました。
内容はちょっと…
でも続きます。

リュー君のお仕事？

＜グランバニア＞
ティミーＳＩＤＥ

僕の目の前にはボルガーレ子爵と息子のマーレスが、僕の右前方の玉座に向かい、膝を付き畏まっている。
その玉座には僕の父…グランバニア国王リュカ陛下が、辟易した顔で座っている。
父さんの右隣には、国務大臣のオジロン、その右には先日、司令長官に昇進したピピンが並んで立っている。
つまり今は謁見中だ。

貴族の一人、ボルガーレ子爵が謁見を願い出てきたのだ。
基本的に毎日謁見を申し込む人が居る。
陛下に直訴したい事や、困った事などを言って解決をお願いする。
中にはご機嫌伺いの為に来る者も少なくない…
以前（オジロンが代理王をしていた頃）は、位の高い人から順に謁見していたらしい。
位の低い人は、陛下への目通りも出来ず、係の人に用件だけ伝える事もあったらしい…無論それは陛下の耳には入らなかったそうだ。
しかし父さんになってからは、先着順で謁見する事にしたのだ。
しかも1日5件と限定をした。
不平不満を言う人はキリがないから…

そしてボルガーレ子爵で本日4件目…
貴族と言うのは待たされるのが嫌いらしく、控えの間で随分と騒いでいた！
しかし、それを聞いた父さんが大激怒し、ボルガーレ子爵を殺しか

ねない勢いで怒鳴りつけていた。
その為か、さっきから一向に本題へ入らず、挨拶なのかゴマ擂りなのか分からない前口上が続いている…かれこれ15分…
「……でして、陛下の政務の大変さは、重々承知しております。私が少しでも軽減でき「もういいから、本題に入ってくれないかな！？」
さすがに我慢の限度が来たみたいだ。
先程、こっぴどく怒鳴りつけてしまったから、少しは遠慮したみたいで、15分も我慢してたよ。父さんが…
出来れば、あと13分早く我慢の限度が来てほしかったけど…

「これは…申し訳ございません！ついつい陛下の政務の大変さ「本題入れっつってんだよ！！」
「はいいいい！！じ、実はですね、陛下にお願いがあって本日参りました！」
「んで、何？」
父さん、かなりなげやりだ！
「はい！我が領地の治安を維持すべく、増兵の許可を戴きたいのですが！」
「あ〝？勝手に増兵すればいいだろ！許可なんか必要ない！しかし子爵の領には、大規模な自警団があっただろ！？治安に問題は無いと思うが…？」
「いえ…その自警団は、平民が勇士で結成した物でして…今回は我が子爵家の兵を増やしたいのです…」
「どっちでもいいよ！勝手に増やしゃいいじゃん！」
「で、では…税金の免除を…お願い致します…」
以前、貴族達が挙兵した時に『貴族が大群を有するのは危険である』と言う結論に達した為、各貴族の軍事力を奪う事となった。
しかし領地を守る為には軍事力は必要な為、全てを奪うわけにもいかず、取った方法が『有する軍事力に対しての課税措置』である。

簡単に言うと、兵士（末端から上級指揮官まで）１人に対し、０．０５％の増税する事が決まったのである。
そして現在、ボルガーレ子爵は約２００人の兵力を有しており、１０％程多く税金を取られる事になっている。
それでも全盛期は、その１０倍の兵力を有していたのだから、今が心許なく感じるのもムリはない…

「何で税金を免除しなきゃなんないんだよ！兵力増やすのは勝手だけど、金は払えバカ！」
…父さん…もう少し言い方があるだろ…公式の場なんだから…
「しかし、これ以上課税されたら、私は破産してしまいます！」
「じゃぁ増兵しなきゃいいだろが！自警団と協力し合えば良いじゃんか！」
「陛下、その自警団が力を付けすぎ、我々領主を脅かす存在になっているのです！」
いきなり息子のマーレスがしゃしゃり出てきた。
コイツは僕と同級生で、学校では同じクラスだったんだが…
ポピー曰く、
『底無しのアホ』
との事だ。
子爵家の嫡男である事を鼻にかけた嫌なヤツで、理由は分からないけど、何時も僕に突っかかって来ていた。
友達に聞いた話では、ポピーに言い寄って酷い目に遭い、同じ顔の僕に逆恨みをしているのでは？との事だけど…
きっとポピーの事だから、とてつもなく酷い事をしたんだろうなぁ…
「はぁ？お前はアホなのか？何で自警団が領主を脅かしてるんだよ！？自警団とは、自分たちを守る為に組織された団体だ。自分たちに危険が及ばない限り、武力を行使する事は無い！どうせ領民達を力で押さえ付けてたんだろ！それを不満に思った領民達が、自警団を組織したんだ。自業自得じゃねーか、アホが！底無しのアホだな

！」
父さんにボロクソに言われたマーレスは、顔を真っ赤にして震えている。
拳を握り締め、今にも殴りかかりそうだが…
出来れば止めてほしいな…
僕の仕事が無駄に増える。

僕は陛下直属の近衛兵として、任務に従事てる。
僕より強い人間を守らなければならないと言うのは甚だ不本意なのだが、ピピンが…いや、ピピン閣下が気を利かせて配属してくれたのだ。
父さんは『甘やかすのは良くない』と言って反対したのだが、オジロン大臣・ピピン閣下・文部大臣のドリス大臣・ビアンカ王妃陛下に説得（強制）され、渋々承諾していた。
従って、この場で陛下に襲いかかる者は、僕が身を挺して防がねばならない。
放っておいたって自分で何とか出来るのに…
「僕から見たら、君達が今しなければならない事は増兵ではない！領民達とよく話し合い、蟠りを解く事だ！貴族である事を鼻にかけず、領民達と同じ目線で対話をすれば、武力衝突を回避できるだろう」
睨み立ち尽くすマーレスを見て、さすがに不味いと思ったのか、珍しくまともな発言をしている。
普段からこうであってほしいのだが…
「我ら貴族が、領民達と対等に話すなど…」
…本当に底無しのアホだな…
「出来ないと…？」
「……我らには貴族の誇りがある！」
「そうか…では死ね！」
「な！？」

「領民達が武力発起するまで、その傲慢な誇りで高圧的に生き、殺されてしまえ！」
父さんはそこまで言うと、右手の甲を上に降り無言で退室を促す。
そして僕に目で合図をする…これ以上此処に留まるのなら、反逆の遺志有りと認識せよと…
軍の支給品である『鋼の剣』を半分程まで抜き、こちらの意志をボルガーレ子爵親子に見せつける。
先程まで真っ赤だったマーレスの顔が真っ青に変わり、慌てて謁見の間から出て行った。

剣を元に戻し「ふぅ」と溜息を漏らす…
父さんも同じ気持ちだったのだろう…溜息を漏らすと愚痴が出る。
「底無しのアホだなアイツ！ボルガーレ子爵は何であんな息子を同伴させたんだ？何かの役に立つと思ってたのか？」
「きっと王女殿下との出会いを期待してでしょう…」
「やれやれ…さぁ、次で最後でしょ！疲れたから早く終わらせよ！あのアホのせいで、何時もの３．２６倍疲れた…」
「何ですか…その具体的な数値は…」
僕は呆れながらも、思わず突っ込んでしまう。
「意味は無い！ただ、疲れたっぷりをアピールしたかっただけ」
はぁ…やれやれなのはこっちだよ……

ティミーＳＩＤＥ　ＥＮＤ

リュー君のお仕事？（後書き）

因みにこの話は、リュカがＤＱ？の世界へ飛ばされる、半年前という設定です。
ま、そんな事はどうでもいいですね。

リュー君のお仕事？

＜グランバニア＞
オジロンＳＩＤＥ

本日４件目の謁見者も終わり、やっと５件目…ラストである。
基本、謁見には大人数では立ち合わない。
例外もあるが、それは直接立ち合わせた方が良いと、判断した場合である。
しかしボルガーレ子爵が出て行ったのと入れ替わりで、幾人かが入室してきた…
ビアンカ王妃陛下を筆頭に、ドリス・スノウ・ピエール・そして数人のメイドや女官等が…
確か次は…
「陛下、次の謁見者は、南方の国『ホザック』より参りました商人でございます」
そう、女性方のお目当てはショッピングだ！
本来この様な事は許されるべきではない！
これは公務なのだ！
買い物がしたいからと言って、気軽に立ち合う事など…
私はリュカに目で訴える。
気付いたリュカは、小声で…
「ムリだよ…僕に止められるわけないだろ！ビアンカ・スノウ・ピエールはどうにかなっても、アナタの娘さんにボッコボコにされます！」
……ハァ…困ったものだ…
瞳を輝かせた女性陣が、リュカの左側に並び終わると、控えの間との扉が開き商人等が入室してきた。

先頭を歩くのが代表者であろう…
背丈はあまり高くはない…肌の色は生白く、瞳が異様に大きいく、は虫類を思わせる様な顔立ちをしている。
その後ろに付き従うのは、筋骨隆々のボディーガード2名。
見るからに筋肉バカだ！
そして、その後に続く異様な一団…
20名くらいは居るであろう…全員、同じ恰好をし商品の服やら宝石やらを運んでいる一団…
この商団の制服であろうか…真新しい真っ白い麻のローブに白い靴…そして無意味にゴツイ首輪をしている…
嫌な予感がした私は、リュカの顔を見る…
先程までは疲れ切っていた表情だったのが、一変して険しい顔になっていた。

「お初にお目にかかります。私はカオフマンと申します。ホザック王国を中心に商いをしております」
カオフマンは不愉快なまでの営業スマイルで話し出す。
まるでエサを見つけた蛇の様に…
「偉大なるグランバニア国王陛下におきましては、ごきげ「前口上はいい！」
カオフマンの言葉を遮り、リュカは立ち上がる。
「此処には商いをしに来た…と言う事は、その後ろに並んでいる同じ恰好をした人達も、君の商品なのかな？」
「流石はグランバニア国王陛下！お目が高い！！」
営業スマイルを更に綻ばせ、腰を低く擂り手で話す男…
リュカは不機嫌な表情のまま、商品である彼等、彼女等に近付いて行く。
「商人にとって重要なのは情報です！僭越ながらグランバニア王国につきましては、調べさせて頂きました。そして現在、国土開拓の為に人員が必要であると結論に達しました」

リュカは商品を確認するかの様に、奴隷達の状態をチェックしている。
どうやら白いローブの下は裸の様で、外見だけをキレイにして体裁を取り繕ったみたいだ…
「なるほど！人員…労働力という事か！」
振り返ったリュカの表情は、満面の笑みで満ち溢れていた…
リュカの表情を見て確信した私は、ピピンに目で指示を出し、衛兵を謁見の間の外に待機させる事にした。
はぁ…今日は何って日だ…
「作用でございます陛下！簡単な食事だけで酷使できる労働力、壊れても代えでしたら私めが幾らでもご用意させて頂きます！」
「しかし２０人しか居ないのでは…しかも半分は女性だし…」
「ご安心下さい！こちらに連れてきたのは、ほんの一部です。停泊中の私の船には、まだ５０人程のストックがございますので…それに陛下…女は別の用途がございましょう…その為に見栄えの良い物を厳選して参りました。如何です？」
カオフマンは得意満面でリュカの顔を覗き込む。
「あはははは！気が利くねぇ、君！」
「お褒め頂き「でも、舐めないでもらいたいな！」
急にリュカの声のトーンが変わった！
そして背筋が凍る様な冷たい瞳に…
「金で女買わなきゃならない程、飢えてる様に見えるのか？」
「い、いえ…その様な事は…」
やっとリュカの怒りを感じる事が出来たのであろう、カオフマンは狼狽え始める。
「商人には情報が重要？お前、グランバニアの事しか調べてねーだろ！僕の事を何一つ調べてねーだろ！」
「そ、そんな事は…ぐはっ！」
リュカは左手でカオフマンの首を掴み、頭上高くへ持ち上げる！
ボディーガードが慌てて助けに動くが、同時に入ってきた衛兵達に

阻まれ、身動きが取れないでいる。
「教えてやる、クソ野郎！現在のグランバニア国王は、過去に１０年間、奴隷として生きていた時代があるんだよ！」
言い終わると、ボディーガードに向けてカオフマンを投げ付ける！
カオフマンはボディーガード二人と倒れ込み、咽せ返っている。
「おい！クソ商人！此処にある商品全てと、お前の船及び船内の商品、そしてお前等の命を買ってやる！」
そう言うと懐から１ゴールドを取り出し、カオフマンに投げ付けるリュカ。
「な、１ゴールド！？幾ら何でも…「じゃぁ買わん！お前は死刑だ！イヤなら１ゴールドで納得しろ！」
つまりは全て没収…と言う事だ。
カオフマンは渋々了承する。
しかしこのまま帰したら、まだ被害者が出るのでは…？
そう思った時にティミーが発言してきた。
「陛下！この者は不敬罪に類する行為を行いました！どうか処罰を求めます！」
「不敬罪？何それ？」
「……えっとですね…へ、陛下が奴隷であった事を知らないにしても、奴隷を売りつけに来るなど、無礼極まりないという事です…」
「あぁ…つまり僕を怒らせちゃったから、懲らしめちゃおって事！うん。そこら辺はよろしく！」
「そ、そんな！さっき死刑は無いと…」
「それと不敬罪は別件だ！投獄しておけ！」
ピピンがテキパキと処理を進める…さすが私の義息子！ウンウン、良い働きっぷりだ！
「あ！ピピンお願いが…」
「は、何でしょうか！？」
「うん。アイツの船に部隊を派遣して、残りの人達の保護を頼むよ。

アイツの部下が残っていると思うから、気を付けてね」

ピピンが部下を引き連れ港へと向かう…

リュカは元奴隷達に近付き、無骨な首輪を外そうとしている…が、

「お、お止め下さいませ、陛下！これは外してはなりません！」

必死で抵抗された。

「？…実はお気に入りですか？」

首を傾げ何時もの調子で呟くリュカ…そんな訳ないだろう！

オジロンＳＩＤＥ　ＥＮＤ

リュー君のお仕事？

＜グランバニア＞
リュカＳＩＤＥ

クソ商人共が連行され、戸惑い怯えている元奴隷さん達の少女に近付き、ダッサい首輪を外そうとしたら、
「お、お止め下さいませ、陛下！これは外してはなりません！」
必死で嫌がられた。
「？…実はお気に入りですか？」
それとも嫌われたかな？さっき服の中覗いちゃったからなぁ…
「も、申し訳ございません！この首輪は大変危険な物なのです！陛下にもしもの事があっては…」
「…何が危険なの？それ…ダサいから取った方が良いと思うんだよね」
「この首輪、仕掛けがありまして…勝手に外すと『メガンテ』が発動する様、魔法が施されております…」
元奴隷の少女が、悲しそうに説明してくれる…
「しかも、この首輪には奴隷の居場所を、特定する魔法もかけてあるらしいのです…以前カオフマンが、逃げ出した奴隷を水晶を使って探し出してました」
なるほど…奴隷である証って訳だけでは無かったんだ！頭良いねアイツ…後で一発ぶん殴ろ？

「う～ん…困ったねぇ…お嬢ちゃん、外し方知らないよねぇ？」
まだ１２．３歳くらいであろう元奴隷の少女に訪ねてみるが…首を横に振るだけ…当たり前か…
「お嬢ちゃんお名前は？」
「は、はい！私ユニと申します！」

「じゃぁ、ユニ。一緒にアイツの所に行って、外し方教えてもらおっか！えーと…何つったけアイツ？カ、カオフンデマンだったけ？」
「陛下、カオフマンです」
ティミーが優しく教えてくれた。
「ティミーも一緒に来てよ。一緒にお願いしよ」
「お願いって…教えるわけないじゃないですか！」
「相変わらずだなぁ～君は～！そんなもん聞いてみなきゃ分かんないだろ」
俺はユニの手を引き、地下牢へと下りて行く。
そう言えば俺、グランバニアの牢屋に行くのって初めてだ！

牢屋…其処はジメっとしてて、変な臭いがする所。
俺ここキラ～イ！
さして広くない独房の1つに、さっきの商人…カオ…なんとかってヤツが蹲っている。
少し離れた独房に、ボディーガードも別々に入れられている。
番兵に牢屋の鍵を開けてもらい、クソ商人の独房へ入る。
入ってきた俺を恨めしい目で睨むクソ商人。
取り敢えず1発ぶん殴ってから話を切り出した。
「ねぇ、お願いがあるんだ！この首輪の安全な外し方を教えてよ！」
「へ、陛下！何でいきなり殴ってるんですか！？教えてくれるわけ無いでしょう…それじゃ」
さすが突っ込み要員のティミー君！素晴らしい突っ込みだ…ナイスなボケ役が居れば、漫才師になる事も出来るだろう。
「うん。メンゴメンゴ！面見たら殴りたくなっちゃって！まぁ…許せよ…な？」
「ふざけるな！誰がお前になんか教えるか！」
口と鼻から血を垂らしながら、威勢良く突っぱねられた。
仕方ないからもう1発ぶん殴り、床に倒れ込んだクソ商人の顔を踏

み頼み込む。
「そんな事言うなよぉ～…この通り、お願いだよぉ～」
「な、何がお願いだ！！これがお願いする態度か！！」
「だってカオフンデマンだろ？顔踏んでほしいんだろ？」
「私はカオフマンだ！顔踏んでほしい訳ではない！足を退けろ！！」
何だコイツ偉そうだな！
俺は踏むのを止め、このクズの頭を鷲掴みにし、俺の目線の高さまで持ち上げる。
「ほら、踏むの止めたよ。さっさと外し方を教えろ！言わないとこのまま頭を握り潰すぞ！」
少しずつ力を込め、苦痛を与える。
「うぎゃぁぁぁ！！ヤメロ！言う！言うから！」
俺は手の力を抜き、喋れる様にしてやる。
「……実は…私も知らないんだ…」
「……あ〝？何！？」
俺はまた手に力を込め、コイツの頭を締め付ける。
「ぎゃぁぁ！ほ、本当なんだ！外す事無いと思ってたから、知らないんだ！！ぐあぁぁぁぁ！！頼む！！止めて！！」
「へ、陛下！！止めてあげて下さい！！本当に知らないんだと思います！だから止めてあげて下さい！！」
驚いた事に、ユニが俺に止める様懇願してきた！
俺はカオフマンを独房に隅に放り投げ、ユニの頭を撫でながら呟く。
「優しいなぁ…ユニは…」
あぁ…思い出すなぁ…
子供の頃、レヌール城でクソジジイボコボコにした時も、ビアンカにこんな泣き顔で止められたっけ…
「おい！外し方知らないんじゃ、どうやって外すつもりだったんだよ！」
独房の隅でカオフマンが啜り泣きながら話す。
「外す事なんか最初から考えて無かった…光の教団に、首輪の作り

方を教わった時に『外す方法は必要ない』と言っておいたんだ…本当に知らないんだ…だから…酷い事しないで…お願い…」
カオフマンは泣きながら話す…
頭を潰されそうになったのが、相当堪えたのか…元から打たれ弱いのか…
奴隷という弱者をいたぶるヤツだ…いたぶられるのは苦手なんだろう…
俺はカオフマンに唾を吐き付け、牢屋を後にする。
心優しいユニの手を引き…
「父さ…陛下は、そうやって女の子を誑かすんですね」
ユニと手を繋ぎ歩く俺を見てティミーが呟く。
甚だ不本意な言われ様だ！
最近生意気な事を言う様になってきた！誰に似たんだ？俺は違うぞ！！
「…何だ？ティミー君は狙ってたのか、この子を…何だったら譲るぞ！」
「ち、違いますよ！何でそう言う結論に達するんですか！？」
「それとも僕と手を繋ぎたかったのか？もう1本余ってるぞ。ほら！」
嫌がらせでティミーに手を差し伸べる。
「陛下の手を握るなんて、畏れ多くて遠慮致します！心底！」
可愛くない！

謁見の間に戻ると、みんな食堂へ移動したと報告を受けたので、俺達も向かう事に。
食堂に入ると、ビアンカ達と元奴隷の方々が、お茶を飲み語らっていた。
ビアンカ達が気を利かせてくれたんだろう…
元奴隷の方々も表情が軟らかくなっている。でも、まだ少し遠慮が

ちだ…
「お！？リュカ、どうだった？外し方喋ったか？」
ピエールが不安そうに訪ねてくる。
「うんにゃ！アイツも外し方知らねってよ！」
「…そ、そうか…」
しくじった…明るめだった雰囲気を、暗くしてしまった！
空気読めないとか言われたくねぇ～！
「陛下…手詰まりですね…」
そしてティミーが追い打ちをかけて暗くする。
よし、チャンスだ！ティミーに擦り付けよう！
「おいおい、ティミー！空気読めよ…そんな簡単に諦めちゃダメだろ！ヤツから聞き出せなかっただけなんだから、手詰まりじゃないよ！」
「そうよ！リュー君なら何とかしてくれるわよ！」
もー、スノウ最高！
その根拠のない信頼…ありがたいね！
「申し訳ございません…しかし、どうするのですか？光の教団は、もうございませんし…解除方法を言っている人間は居ないのでは？」
「ティミー君は堅いなぁ…頭も性格も…男が堅いのは一部分だけでいいんだよ。其処さえ堅ければ女の子にモテるんだよ」
「やだー！リュー君のエッチィ～！」
スノウが楽しそうに笑い、ビアンカとピエールが頭を押さえ首を振る…あれ？もしかして呆れてる？

リュカＳＩＤＥ　ＥＮＤ

リュー君のお仕事？（後書き）

久しぶりのリュカ視点。
すげー書きやすい！

リュー君のお仕事？

＜サンタローズ＞
リュリュＳＩＤＥ

村でリンゴ農園を営んでいるメーロさんの息子のマールス君が、取れたてのリンゴを持ってきてくれた。
私は、お墓に供える花を摘んで帰って来た所だ。
村の入口に入ったら、
「ほらリュリュ！取れたてだから美味いぜ！」
って、リンゴを渡してくれた…
「何時もありがとう…」
私がリンゴを受け取ろうとした次の瞬間…空からお父さんが下りてきた。ルーラの魔法である！
「やぁリュリュ。今日も美人で安心したよ…あれ？またオッパイ大きくなった？」
「やだ、もう…目聡いわね…」
相変わらずのお父さん…急に現れ、爽やかにエッチな事を言う。
他の男性だったら嫌悪するのに、お父さんだと笑顔で許せる…ズルイよね。
「お！？美味そうなリンゴだね！貰うよ！」
マールス君が私に向けて差し出してたリンゴを勝手に貰うお父さん。
「あ！それはリュリュに…」
抗議の声を上げたが、お父さんが素手でリンゴを割るのを見て、言葉が出なくなっている。
半分にしたリンゴの片方を自らの口に…もう片方を、一緒に連れてきた女の子に渡し、話を進める。
「マーサばーさん居る？それとも、男作ってどっか行っちゃった？」
「怒りますよ！ばーさんだなんて…まだまだ若いじゃないですか！」

「あはははは！じゃ、内緒にしといて」
そう言うと、女の子の手を引きサンチョ邸へ歩き出した。
「…マールス君！リンゴありがとうね！」
私はマールス君にお礼を言って、お父さんの後について行く。
いったいあの女の子は何なんだろうか？
まさか…私の腹違いの妹だろうか？
う～ん…否定できないのが怖いわ…

「相変わらずサンチョの入れてくれた紅茶は美味しいなぁ…」
サンチョ邸でしみじみ紅茶を飲むお父さん。
マーサお祖母様を待っているのだ。
「ところでリュリュ…さっき入口で出会った少年は誰？彼氏？何か頼りなさげだったけど…」
「違うよ、お友達よ。3年前にサンタローズへ引っ越してきた、メーロさんとポミエさんの息子さんだよ。リンゴ農園を営んでいるの！美味しかったでしょリンゴ」
「うん。お腹空いてたからね…」
「リュカ様、お腹がお空きでしたら何か作りましょうか？」
「本当に！？いや～悪いねぇ～急に押しかけて食事たかっちゃって！ユニもお腹空いてるから、2人分お願いするよ」
そう言うと隣で大人しく座っている少女の頭を撫でる。
ちょっと羨ましいなぁ…
ところで何なんだろう、この少女は…
服装が変だ。
何が変って…あのゴツイ首輪が変だ…
取ればいいのに…お気に入りなのかな？

サンチョさんの料理と同じタイミングで、マーサお祖母様が2階から下りてきた。

「いらっしゃいリュカ…そちらのお嬢さんは誰？…アナタの娘？…やはりまだ居たのね！母親は誰！？」
お祖母様、決めつけちゃってる！
「ちまいまふ！ほくのふふへひゃはりまひぇん！！」
お父さん、食べながら喋るのは下品です！
「こらリュカ！食べるか喋るか、どちらかにしなさい！」
「……」
お父さんは一心不乱に食べ続ける…
・
・
・
待つ事凡そ１０分。（おかわりまでしたし…）
「……で、その娘は誰の子なの！？」
「違うって！僕の子供じゃないよ！」
「じゃぁ何なの？」
「うん。奴隷を買ったんだ！」
……
（パシーン！！）
マーサお祖母様の平手がお父さんの頬を勢い良く叩く！
「アナタ自分が何したか分かってるの！アナタも奴隷だった経験があるのでしょう！なのに…「ち、違うんです！陛下を責めないで下さい！陛下は私達を救ってくれたんです！」
救った？いったい……
「まだ…救ってないよ…それを外さない事には救ったとは言えないよ…」
「いったいどういう事なの！？説明しなさい！」
「うん。あのね……」
・
・
・

やっぱりお父さんは優しい！
私も見たかったな、奴隷商人に1ゴールドを叩き付けたところを…
「なるほど…その首輪を安全に外したいのですね…」
「うん。母さんなら何とか出来るかなと思ってね。伊達に２０年以上魔界に君臨していた訳じゃないでしょ！？」
「甚だ不本意な言われ様ですね。…まぁいいでしょう…では、ユニちゃんと言いましたね？…その首輪を調べたいので、一緒に書斎まで来て下さい」
ユニちゃんは、少し戸惑いお父さんの顔を見る。
「大丈夫だよ。僕のお母さんだから…とっても優しい人だよ。息子以外には！」
コクっと頷きマーサお祖母様と2階へ上がって行く。

「さて…あとは母さんに任せればいいか…あ～ホッとしたらお腹空いてきた！サンチョ、まだご飯あるぅ？」
「相変わらずよく食べますねぇ…」
そう言いながらもサンチョさんはお父さんの為に料理を始める。
「いや～…体力使うからねぇ～…毎晩！」
毎晩って…
「そりゃ体力使うわよね！未だにルーラを使って、世界を巡ってるんでしょ、リュー君は！」
振り向くとお母さんと妹のフレイが立っていた。
「もう、来たのなら声をかけてくれればいいのに！」
「ごめんごめん！急務があったからね…」
お母さんはお父さんに抱き付くと、娘の目の前で甘え出す…
「いや～でも、本当にルーラって便利だよね！大変な思いをして習得して良かったよ！」
いいなぁ…私もルーラを覚えたいなぁ…
「お父さん。ルーラってどうやって覚えるの？私も使える様になりたい！」

「ものっそい大変だよ！いいの？」
「覚悟はあります！これ程の魔法だもの…どんな試練にでも耐えてみせるわ！」
「……う～ん…じゃぁ『ルラフェン』に行ってごらん」
「ルラフェン？」
「うん。ビスタ港から船に乗って、ポートセルミへ…其処から西に行くとルラフェンだ！迷路みたいな町だから、行けばルラフェンだと分かるよ。其処で『ベネット』って言う爺さんを捜しなさい。その人が知っているから…」
「お父さんが連れて行ってくれないの？」
「手間を惜しんじゃダメだ。苦労してこそ価値があるんだよ」
さすがお父さん！格好いい事言うわ！
「それに…めんどい！…あの町、迷うんだよね…」
……もしかして、こっちが本音？
「大丈夫？危なくないの？」
お母さんが心配してくれる。ちょっと嬉しいな…
「大丈夫だよ。リュリュは魔界へ行った事があるくらいなんだ！それに心強い仲間モンスターが居るだろ！え～と…アクユウ…だっけ？強そうじゃん！」
「アークデーモンのアクデンよ、お父さん！」
「そう、それ！アイツ、リュリュに近付く男を威嚇しまくってるだろ！僕も睨まれるんだ！娘に手を出すかっつーの！そりゃぁ、リュリュは僕好みに成長してるけど…」
ちぇっ！さすがのお父さんも、娘には手を出さないらしい…残念！
「じゃ、折を見てルラフェンに行ってみるわね！」

ルーラ習得について色々教わったところで、2階からマーサお祖母様がユニちゃんを連れて下りてきた…手には無骨な首輪を持って！
「母さん！？外す事が出来たんだ！」
「まぁ…ね！簡単だったわよ。『マホトーン』で封じる事が出来た

わ」
「マホトーンでぇ！？」
「そのくらい思いつかなかったの？」
「だって、僕はマホトーンを使えないもん！」
「……確かティミーちゃんが使えたでしょう」
「アイツがそんなに気が利くと思うの？思考が堅いんだよ！まだリュリュに未練があるし…」
「まぁ…あの子の美点でしょ…父親に似なかった事は！」
「言ってくれるね！まぁいい…自慢の息子に活躍して貰う為に、今日はもう帰るよ」
お父さんはお母さんと濃厚なキスをして、ユニちゃんと一緒にルーラでグランバニアへ帰って行った…
うん！私もルーラを覚えよ！

リュリュSIDE　END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0510x/

ドラゴンクエストＶ～友と絆と男と女(外伝)

2011年11月21日23時48分発行